

日本とアラブ 思い出の記 (その2)

昭和56年3月

日本アラブ関係国際共同研究国内委員会事務局

## 目次

アラブ諸国との古い関係回想・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

日本人とイスラームとの関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1

田村秀治

# アラブ諸国との古い関係回想

田村秀治

とき 昭和五十三年十月二十三日  
ところ アジア経済研究所 8A会議室

## まえがき

今では第一次大戦前のことが殆ど忘れられているので、そういう点について少し記憶を辿ってお話させていただきます。私も既にもう七十才（註、この講演当時）を超え、戦前エジプト時代の人、私の最も長く世話になりました初代アレキサンドリア総領事の横山さんも、二代目の北田さんに続いて今年なくなられ、外務省員であった人のみならず、横浜正金銀行や日本綿花等に勤められた人々も殆ど亡くなっています。従って、事実を詳しく調べるには外務省の古い記録によらねばなりません、今その閑はありませんので、私の今述べますことは皆さんの研究にヒントを与えるという程度にお聞き願いたいと思います。

### 一、天皇陛下訪欧の途独立前のエジプト

摂政官で在らせられた天皇陛下は大正十年三月三日御召し艦香取にて横浜港をご出発になり、四月十六日ポートサイドで下艦された。同地より汽車にてカイロを訪れられ、イギリスの高等弁務官の公邸に四日間ご宿泊になり、その間、博物館やピラミッド、スフィンクス等を見物された。

同月二十日ポートサイドへお帰りになった陛下は再び御召艦にてマルタ島經由欧州諸国を御訪問になり、七月中旬ナポリより往航では供奉艦であった鹿島に御乗艦され、以後、往航と逆のコースで半年振りに御帰国になった。

陛下のエジプト御訪問の当時はエジプトはいまだ独立せず、イギリスの保護領であり、当時同盟国であったイギリスの高等弁務官（ハイ・コミッショナー）が万事アレンヂ申し上げたと承っています。

### 二、第一次大戦前後のエジプト在留日本人

#### （一）ファドリー・セン

明治時代から大正の初めにかけて、日本人でエジプトへ渡り住んだ人は、エジプトの陸軍大佐ファドリーと結婚したセンという女性です。彼女は社交界にも顔広く出入りしていた由ですが、ファドリー大佐が比較的若くして死んだので、セン夫人は子供もなかったので日本に帰ってしまった。同夫人から横山総領事に対し、ファドリー大佐の遺産請求の要請があったのですが、ファドリーの一族は、同夫人がエジプトへ来て生活すればとの回答

であった。横山総領事は、センの背後には誰か悪い日本人がついているようであると語られていた。

#### (二) 日本の娘子軍

センに続いて、天草か島原方面より、女性四人がエジプトへ進出しに行った。初めは、カイロ中心街にあるコンチネンタル・ホテルの前横にあるエズバキヤ公園近くの公娼街で働いていた。この公娼街は、私の戦前エジプト在勤中に政府が取払ってしまった。四人の中の一人は、間もなくチェコ人の技師と結婚し、私のエジプト在勤当時は、男子二人をもうけて幸福に暮らしていた。残る三人は、第一次大戦でわが国が商船護衛のために特務歓迎を地中海に派遣し、これがアレキサンドリアへも寄港するようになった時、彼女たちも同地へ移り、戦争終了後帰国したとのことであった。

#### (三) 南部憲一

さらに忘れてはならない人物は、南部憲一さんである。彼は大正六年ポートサイドに来て、同地のヒョラバンテというイタリー人の商会に雇われ、ポートサイドを通過する日本船に絵はがきやみやげ品を売っていた。主人に見込まれた同氏は、お嬢さんと結婚し、その後同商会より独立して南部商会を起し、日本船に食料品等を納入するとともに、船客のカイロ見物案内の業務などを行い、成功しました。しかし、一女兒をもうけた奥さんが長い病気の末自殺(これは私が総領事館在勤時代のことであります)されると、日本女性と再婚された。その後ポートサイドの店を実兄に委かし帰国してしまいました。

### 三、日本郵船の役割

#### (一) 欧州航路

前述したように、日本人はぼつぼつエジプトへ出かけて行ったのでありますが、日本人とアラブ諸国との交流について大きな役割を果たしたのは、何といたっても日本郵船の欧州への定期船であります。スエズ運河を通過してヨーロッパを往復したこの客船(もちろん貨物をも積載し、わが輸出入に大きく寄与した)です。日本郵船の欧州航路は、明治二十九年に土佐丸を最初に配船、開始され、その後明治三十二年には欧州同盟に加盟し、週二回の貨客定期船を欧州航路に配船したのです。当時ヨーロッパへ行く日本人は皆日本優先の欧州航路船に乗って行ったのです。

大正末期よりはこの航路に一方屯級のいわゆるHクラスの白山、榛名、笠崎および箱根の四隻が加わり、さらに昭和五年以後には照国、靖国という豪華な二隻が配船されていました。後述の照国丸を除くこれらの船は大東亜戦争に徴用され撃沈されました。

#### (二) リバプール航路

郵船は欧州航路のほかに、貨物専用船をリバプール航路として配船していましたが、一年に八隻を中近東へ寄港させていました。アレキサンドリアでは綿花を積んで帰るのが目的でした。この航路は、政府から補助を得

た命令航路でありました。

### (三) 郵船利用客のカイロ見物

同社の欧州航路を利用し渡欧した有名人がスエズで上陸、乗船のスエズ運河通過の間を利用し、陸路自動車でカイロへ行き、夜のカイロを楽しみ、翌日カイロを見物し、夕方汽車にてポートサイドに赴き、同地で再び乗船したわけであります。

### (四) 欧州航路を利用された皇族の方がた

高松宮、同妃両殿下は、鹿島丸にて昭和五年の五月に欧州旅行の途、カイロ見物をされ、また昭和九年の四月末には、賀陽宮恒憲王、同妃両殿下も欧州の途カイロで一泊されました。

### (五) 郵船の被害

第一次大戦中の大正四年末に、郵船は、八坂丸を地中海でドイツの潜水艦に撃沈されました。八坂丸には金塊を積んでいました。この引き上げは、昭和五年秋に行われたと聞いております。わが国は、イギリスとの同盟関係で地中海に特務艦隊を送り、商船護衛に当たらせました。

第二次大戦中、照国丸は昭和十四年十一月ロンドン入港直前、機雷に触れ撃沈しました。

それから、イタリーの参戦で地中海が通れなくなりましたが、最後に通過しました伏見丸には、ロンドン等に在勤の外交官夫人等が引揚げました。同船は、カサブランカ、ケープタウン経由で帰航しました。

郵船は前述のように大東亜戦で欧州航路船のすべてを失いました。

### (六) 郵船の復活

大東亜戦争で壊滅に瀕した郵船は、戦後次第に立ち直り、一九五四年の秋には、中近東航路開設にまで立ち至り、私のシリア在勤当時、その第一船の赤城丸がラタキア港へ初寄港し、また一九六〇年一月、私がサウディアラビアに大使館を開設した頃には、欧州航路船はジェッダにも寄港しているという驚異的回復を実現していました。アレキサンドリア、カサブランカ、ラタキア(シリア)およびジェッダと港のある国に在勤した私としては、特に喜ばしい次第であります。

## 四、商社の進出

### (一) 初期の進出

わが商社の中東進出は、没落した鈴木商店がポートサイド駐在員を派遣したのと、日棉実業の前身の日本綿花が大正十年アレキサンドリアに駐在員を派遣し、大正十二年には出張所として、エジプト綿の買付けと、綿布を中心に繊維品や雑貨を売り込んだのが初めてです。

ここでちょっと余談になりますが、牟田口さんが、『中東通報』に書かれた志賀重昂さんが、オマーンからバグダードへ入り、同地よりダマスカスに出て、トランスヨルダンのアンマンに行き、アブドゥッラ公(後の国王)に会ったこと、および中東の重要性を感知したとありますが、これ

は日棉の進出の後です。

## (二) 本格的進出

わが国の経済進出が本格的となりましたのは、横浜正金銀行（東銀の前身）が大正十五年の三月にアレキサンドリアに出張所を開き、同じく三月に日本政府がアレキサンドリアに総領事館を開設してからであります。昭和七年には三井物産が、翌年には三菱商事がそれぞれアレキサンドリアに事務所を開設し、東棉や鐘紡も駐在員を派遣してきました。アレキサンドリア総領事館の開設より七年も前の大正八年に、ポートサイドに領事館が設立されたのでありますが、これは郵船の寄港と関連あるものです。天皇陛下が東宮時代に同地を御通過されたのは大正十年で、益子さんが初代領事でありました。その後、アレキサンドリアの総領事館は昭和十一年一月一日に公使館がカイロに開設されますと、領事館に格下げになったわけであります。

昭和の初めから、わが綿布や絹、人絹製品がアレキサンドリアを中心にエジプトのみならず、同地を仲継に近東諸国へどんどん輸出され始めました。日本品の輸入商はほとんどがユダヤ商人でありました。唯一の例外ともいえるのは、カイロのシリア系のハビーブという商人で、兼松（現在の兼松江商）と取り引きし、スエズ経由でサウディアラビアへも商品を買っていました。アレキサンドリアを中心にしてシリア、レバノン、パレスチナはもちろんバルカン諸国まで仲継貿易をやっていたのはユダヤ人商人で、綿布輸出の大手筋であった丸紅や伊藤忠の代理店はユダヤ人商人であり、日本棉花、正金銀行のクラークは例外なくユダヤ人でありました。

## 五、在外公館の充実

前述のように、昭和十一年一月にカイロに公使館が開設され、翌十二年の一月にはベイルートへは小長谷さんが初代領事となられ、その下に先輩の大原さんが配属になった次第です。同年の十月カサブランカに領事館が開設されることとなり、勝田領事とともに私が赴任（私は五月末に十年ぶりにエジプトより帰国し、数ヶ月後にカサブランカ在勤を命ぜられました）した次第であります。ついで昭和十四年にはイラクに公使館が開置され、隈部公使が赴任しました。以上の六公館が戦前におけるアラブ諸国のわが公館であり、その他の中東諸国にはトルコに大使館、イランとアフガンに公使館がありました。

## 六、公館の閉鎖

ついでにアラブ諸国における公館の閉鎖について述べます。

### (一) 在ベイルート領事館

ベイルートはドゴール派のカトルー将軍がレバノンを占拠しましたので、昭和十六年の二月十五日に領事館閉鎖のやむなきに至った次第であります。

### (二) カサブランカ領事館

カサブランカの方は、仏印に進駐するにあたって領事館を開設する必要があるところ、それには外貨がいるからというわけで、カサブランカとバルセロナなど三ヶ所の領事館を閉鎖することとなり、私にはイラク在勤の命がきました。この閉鎖の時にビッシーの加藤大使(在任中パリーで死去)や原田健参事官(戦後イタリー大使や宮内庁式部長官を歴任された)が北阿の重要性を考え、私にビッシーに残って北阿情勢を観るよう言うてくださった。しかし私はイラクがどうなっているかも知らず、アラビア語の活用できる地へと強い望みで、これを断り、昭和十六年八月四日、カサブランカ発オラン、マルセーユ経由ビッシーに赴き、同地でイラクの査証を取りつけバグダードへの旅を続けました。ベルンでは盟邦であるドイツの査証を取得するのに二週間も要し、さらにバグダード鉄道でシリアを通過するための査証に、これまたイスタンブールで二週間待ちを要し、九月三十日やっとバグダードへ着きました。この時イラクは同年五月のガイラニの反英抗争の後であり、イギリスが完全にイラクを制えていました。

### (三) 在イラク公使館

私は着任してほっとしたと思っているうちに、宮崎公使を退去させたことで十分とし、対日断交を拒絶していたタウフィーク、スワイディ首相に代わった親英の巨頭ヌーリー、サイド(一九五八年七月の革命で虐殺された)が、十一月十一日わが国との外交関係を断絶した。これはご存知かと思いますが、ガイラニの反乱の時、当時の宮崎公使(四月に着任、ガイラニ政権時代の摂政に信任状を捧呈していた)が、ガイラニの反英抗争を支援する文書を送っていたのが、ガイラニ政権の没落後発見されました。ガイラニ政権が倒れ、アブドゥル・イラー摂政(ファイサル二世王の母方の伯父であり、国王の父ガージー一世王の従兄弟)に信任状を捧呈しなおせということを書いて来ました。日本側では信任状の再捧呈ということは極めてむずかしいことであり、ぐずぐずしているうちに八月になって、好ましからざる人物として宮崎公使は追放され、私が着任した当時は、笹本さんが臨時代理公使であった。十一月十六日断交された私たちは、十二月十一日KLM機でバンコクまで飛んで帰ろうとしていましたら、八日にわが国が戦争に突入したので、私たちはバンコクへ行けず、イラクの公使公邸で足止めとなった。わが外務省は、岡留学生をイスタンブールへ転学させることとし、査証を要請していたところ、イラク官憲は査証を与えるからの口実で岡君を公使館から呼び出し、警察へ軟禁しました。岡が外出したまま帰ってこないというので、私が警察へ問い合わせの電話をかけておいたところ、岡君の方から電話をかけてき、警察に抑留されているというので、直ちに飛んで行った。そこは警察士官の宿舎で、士官たちは私が実情を話すと、皆同情的で、心配するな、自分たちは岡を大事に取り扱うからと言ってくれた。私は次の日に笹本さんの命をうけて内務大臣に会い、岡の地位を説明、釈放を求めたところ、内務大臣は断交した相手国の外交官の私の言に耳を傾け同情的な様子であったが、自分は外交上の問題は判らない、顧問(英人)に聞いて

くると言って席をはずし、五分後に帰ってきた。結果は旅券が外交旅券でなく公用旅券だから当方で軟禁するとのことであつたので、それでは毎日曜日に公使館に静養によこしてくれるように頼んだところ、それは当然だと許可してくれた。岡君は毎日曜の朝、馬車に乗って護衛の警察官と共に公使館に来て、昼食を共にし一日を楽しく送り夕方帰っていった。

戦争に突入して北阿情勢を重視したわが政府は、カサブランカ領事館再開を決し、私を同地に派遣せんと利権代表のトルコ公使を通じ、トルコに赴任させるため、イラク政府にトルコへ向けての出国を要請したが全く考慮されなかった。

かくして、二月の二十一日朝になって、外務省の儀典課長より翌二十二日夕方の汽車でバスラへ向かうよう通知をよこし、これが最後通牒だと言った。笹本代理公使夫妻と私の家族(妻と二女)および岡君は二十二日夕方、わが利権代表トルコ公使と外務省儀典課長の見送りをうけ、バグダード駅を出発した。列車に乗るなり、イギリス大尉と兵三名が護送し、全く捕虜同様となった。バスラへ着くと、幌のついた外から見えないバスに乗せられて、バスラ港につき、同じく幌のついたランチにて一万トンを超える大型のオランダ輸送客船へ移され、その一番上の外の全然見えない所で軟禁されました。それから三日ほどたって夕方、ボンベイ行きのP & O社の船に乗せられてバスラを出港したが、完全に前記英兵の監視下におかれ、シャトル、アラブからアラブ湾の陸地が見えなくなるまでは、外の見えない船室内より出られず、大海へ出てはじめて、時間を限りデッキの一部散歩を許された。ボンベイへ着くと、それまで一緒であつた岡君は上陸するなり保安官が来て他へ連れて行くというので、岡君の悲しみを知った家内はおーおー泣く始末であつた。笹本代理公使は自分で書いたメモなどを押収するというので抗弁で忙しかった。しかし私は下船に先立つ先日スーツケース等の鍵を渡せと言われた時このことを察知し、報告書などすべてを便所のビデで焼いてしまいました。ずい分焼いたものですから、ビデがパチッと音をたててひび割れになりました。要するに書いたものは全部とりあげられたほか、本などはボンベイ出発前に返してくれたのですが、時計や写真機などは返されなかった。岡君がどこに連れていかれるかわからないのみならず、私たちもどこへ連れていかれるのかわからない。ともかく汽車に乗せられ送られたのはカラチであり、日本の領事公邸で軟禁されていた。後者は岡君同様の公用旅券であり、従つて岡君もここに合流させるのが当然と、利権代表国のスウェーデン名誉領事(英人)を通じて、岡の合流と、おそらくラングーンで捕えられたと思われる浅野官務補助員(十二月五日バグダード発、バンコックに向かった)がインド内に居たら一緒に合流させてくれと要請した。約一ヶ月を経たある日、両君が明日合流するとの通知があつた。翌日二人は意気暢暢とわれわれに合流し、われわれの軟禁生活も賑やかとなつた。

#### (四) 在ポートサイド領事館

次にポートサイドの領事館であります。日支事変がおきると同時



に、前述の南部商会を通じ、運河を通過し極東へ向かう船の積荷を探っていた。これは援蔣物資、特に武器を知ろうとする一種のスパイ活動であった。そのためか、大原さんが副領事に任命されたにもかかわらず、査証は与えられず、わが参戦の数ヶ月前に同館は早くも閉鎖を命ぜられた。

#### (五) 在アレキサンドリア領事館

アレキサンドリア領事館も、戦争突入数ヶ月前に閉鎖を命ぜられた。最後の領事の大野さんは、飛行機でバンコックへ向かう途中、同機がバグダード均衡のハッパニア湖の飛行場を通過するので、書類を託送かたがた私も会いました。

#### (六) 在エジプト公使館

当時のエジプト内閣は完全に親英的で、日本の参戦と同時に断交しました。エジプトに居た日本人はみな、日本の公使公邸に収容され、比較的優遇された由です。戦争勃発後九ヶ月して、外交官等の交換がポルトガル領ロレンソマルケスで行われ、ボンベイより英国船で同地に向かった私たちは龍田丸で九月末横浜港へ帰ってきた次第であります。

### 七、国際連盟脱退にともなう邦品差別待遇

#### (一) わが輸出貿易の危機

ご存知のように、日本が国際連盟を脱退致しますと、連盟規約により委任統治地域における衡平待遇を受けられなくなり、非連盟国は普通税率の二倍の高税率をかけられることとなります。よって日本政府はこれを非常に心配しまして、まず通商局第一課長に内定し、ルーマニアより帰国の途にある水野一等書記官をパレスチナとイラクに派遣し、両国当局と折衝させました。その後三～四ヶ月も経ずして、イギリス側が相当エジプトに圧力をかけてきました。それはエジプトは一九三〇年二月に関税自主権を回復し、国内紡績保護のため、再三綿布に対する輸出税を引き上げてきました。結局、犠牲になるのはイギリスやフランス製品であった。イギリスにしてみれば、自国はエジプトから日本の数倍もの綿花を買っているのに犠牲を強いられるとし、わが国の国際連盟脱退の機をとらえてエジプトに圧力をかけてきた。そこでエジプトはイギリスとの経済通商関係を改善するために、ハーフィズ、アーフィーフィ、パシャという外相の経験もある親英政治家を団長とする使節団を、昭和十年の四月にイギリスへ派遣しました。そのようにエジプトも火がついてくる。仏委任統治下のシリア、レバノンにも火がついてくる。既にイラクには火がついている。これの対応策というのが、日本にとって非常に重要なこととなりました。

#### (二) イラク

まず一番先に火をつけたイラクに付いては、在英大使館でやっていたのでありますが、イギリスでは余りにも遠いので、トルコ大使館勤務の  
モト  
本商務書記官がバグダードへ交渉に行くことになりました。そこで在英大使

館勤務の支那通の掛川さんは、事務をトルコ大使館に引継いでもらうためアンカラに赴き、結局本商務書記官（鈴木商店の没落で外務省へ転じた人）とともに、バグダードへ赴いた。バグダードでのイラク政府との交渉は四月初めより始まったが、一ヶ月有余なんら進展なく、五月に入った。急に暑気が加わったため、掛川さんは元来支那通であり、バグダードの暑気に参り、アミーバー赤痢を理由に帰任されることとなり、その後へ私に行けとの電命が届いた。

ところがエジプトの方は、既に遣英ミッションが出掛けた後であり、同使節団が帰国すればエジプトにも火がつくことは明らかであり、経済はもちろん政務まで担当している私を動かすことは非常に困ると、天城総領事は本省へ反論されたが、イラクとの交渉は猶予を許さず、ともかく田村を出張させ、との命であった。天城さんは、大原さんの後任某が電報も打てぬ人物なので、カイロへ留学中の中野君を呼びもどしたいと願われたが、本省はこれも許さなかった。しかし天城さんは中野君をアレキサンドリアへ歸し、私は彼に電信事務を急扨教え込んだ。かくして私は五月十七日生まれてはじめて飛行機に乗り、アブ・キール飛行場を早朝出発、リッダ、ルトバ経由で夕刻バグダードへ到着した。聞きしにまさる暑さで、ちょっと閉口した。

イラクとの交渉は、わが国の対イラク繊維製品輸出額に対し、イラク品を輸入せよ、しかも初年度の一割からはじめて五年目には六割イラク品を買えというものであった。当時バグダードには既に、三菱商事の囑託の資格で金子さんが居りましたが、私の到着して間もなく内地より三井物産の課長クラスの人が二人派遣されてきました。このようにして皆暑さの中での苦しい闘いを続けたわけであり、わが方としては若干の綿花と大麦を買おうとの考えを述べると、イラクは日本も兵隊がたくさんいるのだからデーツを買って食べさせよ。デーツは八十パーセントの糖分を含み、非常に栄養があると、デーツの購入を勧めるのであった。そして当時の首相のヤーシン・パシャ・ハーシミー（後にクーデターで失脚し、同邸は日本の公使館事務所兼公邸となり、外交再開後も一時わが方はこれを借り入れました）は三菱商事と組んでいるらしく、我が方の情報が漏れているおそれのあることを知った。三井物産が二人の社員をアレキサンドリア経由で派遣してきてからは、本さんも非常に慎重に金子さんに処分された。しかしイラク側の態度は強硬であり、交渉進展の見込みはなかった。

## （二）エジプトとの交渉

そうこうしているうちに、エジプトの方は、遣英ミッションの報告もあり、七月十八日に、一九三〇年二月、横山総領事とポルトス・ガーリー・パシャ外相間に結ばれました最恵国待遇を決めた日本とエジプトとの暫定通商取極の廃棄を通告してきました。天城総領事は非常に温厚篤実な人ですが、経済通商問題についてはすべてを私に委せていられたので、即刻私を帰任させるよう本省へ電報されたが、本省の方はバグダードでの交渉を

アンカラに移すこととし、私たちは帰任することになっていたので回答を出さなかった。本さんもアレキサンドリア経由でトルコへ帰ることとし、BOACの前身 Imperial Airways で七月二十日(取極廃棄されてから五日目)に、ルトバ、リッダ経由で帰任した。その晩海岸のカジノで、本さんと私を招いてくださった天城さんのホッとされた様子が今も重いうかばれます。華氏百二〇度以下を超えるバグダードから、同八十二度くらい、しかも八十度以下になっているアレキサンドリアの海岸の夜に私はブルブルふるえる位であった。帰任した私は暑さを感じず、一生懸命総領事を補佐した。しかし現地における商社の総領事を非難する声は強く、エジプトとの交渉にアフガン公使となられた北田前総領事(故浜口雄幸首相の女婿)に来てもらい交渉をとの声すら出ていた。後で知ったのは、本省通商当局でも北田公使をとの声が高かったが、広田弘毅外相は、せっかくアフガンで声価をあげている北田公使でも、相手のある通商交渉では成功覚束ないとの老婆心より、ポルトガルへ帰任されることとなっていた笠間泉雄公使を主席代表として交渉に当たらせることとされた。北田さんはアミン・ヤヒヤ・パシャ(アレキサンドリア商工会議所会頭)と親交があり、当時その実弟アブドゥル・ファッターハ・ヤヒヤ・パシャが首相であったので、邦品阻止の動きをせきとめるのに成果をあげられた。エジプトとの交渉は日印、日蘭両交渉に続いて重要な交渉であり、これで北田が失敗すればせっかく公使になった北田に気の毒だというのが、広田外相の配慮であった。主席全権に選ばれた笠間泉雄さんはポルトガルへの帰任の途中であった。天城総領事を次席代表として交渉することとなっている矢先、エジプト側は暫定取極の失効する九月十八日には、日本円の下落を理由に、普通税率に加え従価四割の為替補償税を綿糸布および人絹織物に課した。円価が下落しているとの理由で従価四割の付加税をわが綿糸布人絹製品に課すことは、邦品の輸入を禁止するのと同然であった。北田総領事時代に東洋紡の重役が来られて、ミスル紡績の創始者タルアト・ハルブ・パシャ(カイロの開放広場に銅像となっている人物)は、大日本紡の猫帽印の粗布の輸出をやめてくれればと要請したが、これは大日本紡のみに非常な犠牲を強いるものであり、問題にならなかった。また、日本の紡績代表团とイギリスとの交渉に当られた日清紡の岡田社長一行が、ロンドンよりの帰途、アレキサンドリアへ立ち寄られ、エジプト側と話し合われたこともあったが、この時も日本側の輸出抑制の話が出ていた。日本品のエジプト進出がミスル紡績に打撃を与えている事実は否み得なかった。

エジプトの機業はミスル紡績とナショナル紡績のみならず、中小企業もあるので、エジプトの国産の実情を調べる必要があった。幸い私は既にエジプトの津津浦浦まで行き、中小の織屋を見て歩いたことがあったのが役立った。従ってこれらを総合した私の結論では、日本側が綿製品輸出を二割五分から三割ぐらい減少すれば交渉妥結の可能性があるものとの確信をもって、現地に居る業界(日棉、鐘紡、三井、三菱、東棉)の方がたにはなしていた。ところが、笠間全権は数量制限については改めて訓令を求めようと

いう厳しい訓令を得られておられ、現地側の考えは一笑に付された。日本からの随員柏村商工省書記官、パリーからの帰途の途津委員に任命された千葉一等書記官などの態度は、エジプトの実情を全く考えない日本独自の考え方であった。大日本紡の小寺社長の女婿で戦後ジェット口の理事長にもなられた原吉平さんなども、私の考えに強く反対されていたが、途中から代表部の首脳を信じられないようになった。頭脳明晰の千葉書記官は、私などに判らぬ難しい税率算出案を相手方に出された。これは幾何学的に税率を決めていく方法であり、数学に自信のある私すら計算に苦勞を要するものであり、エジプト税官吏に算定できないような案であった。私は千葉さんに、「千葉書記官のように頭のいい人は解っても、エジプト人にこんな難しい計算はできません」と述べたところ、強く叱責された。

そういうようにしてぐずぐずしているうちに、エジプト側は為替補償税の実施で邦品を阻止し、自信を得てきたので、交渉をやればやるほど相手を硬化させた。結局、九ヶ月に近い交渉の後得たものは何もなく、そして日本はエジプトにおける綿布、人絹製品の輸出市場を失う破目となった。この失敗が禍いし、ポルトガルへ帰任の途中であった笠間公使は、退陣を余儀なくされた。笠間さんは、はじめから私を中心とした現地側の意見に耳を傾けておられればよかったのですが、何といいましても数量制限についてはなす前には訓令を求めよという一礼があり、それに強引な千葉さんに天城次席代表も押し切られたような格好になり、最後には笠間さんも柏村商工省書記官も競馬に熱が入ったような始末で、交渉は完全に失敗に終わった。

千葉さんは帰国後、通商局第三課長になり、私を呼びもどして交渉をやり直そうという考えであった。しかし、私が帰国した時は、盲腸手術後の経過が悪く、慶応病院へ長期入院中であった(カイロで早朝ゴルフ中に急に腹痛に襲われ、私が自動車でフランス病院へ連れていく途中、「私の経験から言って盲腸炎のようじゃありませんか」と言ったら、「バカなことを言うな、そんなケチな病気じゃない」と頭からひどく怒鳴られた)。

結局、翌年六月まで続いたエジプトとの交渉は、繊維品のエジプト市場を失うのみであった。

### (三) シリア・レバノン

エジプトの交渉に先だち、私がバグダードへ出張する前に、千葉書記官はアレキサンドリアでシリア、レバノンを知っている商社の方がたや私の意見をも徴され、仏委任統治局の総務局長と折衝され、率は定めず、シリア・レバノン産品を買付ける約束にて、差別関税が邦品に課せられぬようされた。もっとも、これは日本の参戦で無効となり、両国は邦品に倍の輸入税を課していた。

わが国が独立回復後の交渉で、一九五三年六月シリアは、綿花五千トンの購入とラタキアに邦船を寄港させる条件で、差別関税を撤廃した。レバノンには、未だ一部差別関税は残っている。

### (四) 残るはモロッコ市場のみ

このように、わが製品はイラクなりシリア、レバノンで虐げられ、一番大きなエジプト市場まで完全に失うに至った。従ってその反動は、すべて自由なモロッコ市場へ殺到した。昭和十二年十二月末にカサブランカ領事館が開設され、勝田領事の下で私は同館に勤務していた。カサブランカには、三井物産の武山十一夫さんと三菱商事の広庭さんが常駐されていました。カイロで商品館の副館長であった滝さんが、貿易斡旋所所長として少し前に赴任されていた。私が着任後に、内地から又一、鐘紡、田村駒の各駐在員がユダヤ商人レービーの店に、また服部、岩井両社の駐在員も押し寄せ、なかなかの勢いで綿布を中心に邦品の売り込みにあたった。

イギリスはモロッコ市場での日本品進出を統治国のフランスと共に制えるため、過去の実績による割当制を布かんとした。ただし、アルヘシラス条約で機会均等の待遇を与えることとなっており、他の加盟六カ国の同意を取り付ける工作を始めた。わが国は同条約加盟国ではないが、日仏条約により均等待遇を受け得ることとなっていた。この英仏条約実施を阻止するため、アルヘシラス条約加盟の他の六カ国の駐在大公使に働きかけるよう申し入れたのに対し、欧州情勢が緊迫しつつあったためか、回答がきたのは在オランダ臨時代理大使萩原書記官（後の駐仏大使）よりのみであった。

#### 八、石油利権獲得の交渉

忘れてならないのは、サウディアラビアで石油利権を獲得するため、昭和三九年三月から四月にかけて横山公使がリヤドを訪問、同国当局と交渉されたことであります。サウディアラビアとの関係については、北田総領事が一九三四年八月離任前にパレスチナを訪問された時、私の紹介でグラン、ムフティのハージ、アミン、フサイニーに会われ、サウディアラビアとイエメンとの国交開設について頼まれた。一九三六年初春、グラン、ムフティはアブドゥル、アジーズ王とイマーム、ヤヒヤー王よりの回答をもって、天城代理公使を訪れた。内容は、両国とも日本との国交開設を希望してあるが、自分の国がカイロまで送る人材がないので、自国へ適当な代表を派遣して交渉してくれというものであった。天城さんはエジプトとの交渉が一段落したら、私を連れて両国訪問の考えがあったが、ブラジルへ参事官として赴任されることとなり、時を同じくして私にも帰朝命令がきて、実現しなかった。

その後一九三八年、代々木にモスクが建設され、その開堂式にハーフェイズ・ワハバ駐英公使（後に大使となり、一九五六年秋のスエズ戦争で対英断交まで歴任し、復交後再び赴任した人物で、私も代理大使時代、ジェッダで二～三度会った）が来日した。なお彼の息子のユーシフ・ワハバは一九六〇年末、若くして経済、財務担当の次官になったが、何等か考えるところあり、養鶏業に転向してしまった。次官当時、こういう宮仕えはつまらないと盛んに言っていたし、彼を抜擢したタラール大臣殿下も、サラード王が金よこせ、金よこせというので、数ヶ月の在任で退陣したのも一因であったのであろう。

ワハバ公使の来日の答礼をも兼ね、横山さんは三土商工技師と仲野君を連れ、リヤードへ赴き交渉されたのでありますが、この交渉をイギリスやアメリカが邪魔したと言われてはいますが、むしろわが国としては先方の条件が受諾できなかったのが真相であります。わが国が求めた地域はリヤード周辺でありまして、たとえ利権獲得に成功していたとしても、わが参戦でどうなったか判らないでしょう。いずれにしても、横山さんはなくなれる前にも、難しい交渉であったと述懐されていました。

#### 九、練習艦隊のポートサイド、アレキサンドリア寄港

先に申しましたとおり、第一次大戦中にわが国はドイツ潜水艦による一九一五年はじめには日本郵船の八坂丸が撃沈されたこともあり、日英同盟に基づき、地中海に駆逐艦八隻を含む第二特務艦隊（旗艦は巡洋艦明石）を派遣していた。

戦争終了後、わが海軍は士官候補生を乗せた練習艦隊を二～三年ごとに地中海方面に派遣していた。年次と司令官名および軍艦名を列記しますと

大正十五年	山本英輔司令官	八雲	出雲
昭和 六年	左近司政三司令官	八雲	出雲
九年	松下元司令官	盤手	浅間
十二年	古賀峯一司令官	八雲	盤手

これらの巡洋艦は日露戦争に活躍した老朽船であります。エジプトとの交流には大きく役立ったと言えます。

私は昭和六年と九年の時は、横山、北田両総領事を補佐し、積極的に働きました。そのときの逸話を紹介しましょう。

##### （一）横山総領事と若い将校

左近司司令官の時、横山総領事は勲章問題で、艦上晩餐会の後で、シドキー首相に甚だしく喰いさがられた。同首相が帰った直後、ガンルームの将校たちが、総領事を呼びにきてその日の王立アントニアディス・ガーデンの宴遊会で、剣道試合に出た下士官兵に出す菓子類がなくなり、テーブルに残っているのをかき集めたこと、および剣道の型と試合の間にスペインダンスを入れたことを促え、総領事に文句を言い回答を求めた。心配していると、総領事は前者を否定され、後者についてはダンサーの衣装替えが必要であり、時間節約のためかくなつたが、これにより剣道がいっそう引き立った。二十人の在留邦人で、手の届かぬところは許されたい。ともかく、将来の大臣、軍令部長、艦隊司令官のため乾杯しようと言われると、若い士官はこの領事は話がわかる、立派だ、将来の外相のために乾杯しよう、空気は一変して終った。

##### （二）思い出の多い昭和九年の練習艦隊

それから昭和九年は宇垣中將が予定されたが、実兄の陸軍大將が軍に嫌われた余波で、中村中將兵学校校長に変更された。しかし選任参謀以下

幕僚は宇垣中将が選んだ人ですから、双方に溝があったようです。私は艦隊がポートサイドに着く時領事館に手伝いに行き、艦上講演をさせられた。前任参謀たちが、その後上陸してノンビリ遊びたいというので、私が同行運転手に頼んで適当な所へ連れて行ってもらった。艦隊がイスタンブールへ向かうのを、運河の出口まで見送ったが無感量であった。

六月一日、艦隊がアレキサンドリアへ入港したのを出迎えた時、多田前任参謀(後の海軍次官)や鮫島参謀は、今日は答案の採点で下船できない、と観念していられた。私は艦上講演をやっていたため、タキシードに着換える時間がなく、一人平服であったが、北田総領事はじめ在留邦人は皆タキシードでホテルでの晚餐会に臨んだ。ポートサイドで多田参謀よりアレキサンドリアでの行事打ち合わせを行った時、この晚餐会には艦隊の首脳ばかりでなく、少佐以下少尉までの各代表を招いてほしいとの要望があり、そのとおり取り計らった。晚餐会の後、若い士官はキャバレーへ行きたいというので、日棉や正金銀行の人びとが彼らを連れて行ってくれた。三井、三菱は人手も少なかったので、私たち館員も手伝った。次の日司令官と両艦長はファード一世王の謁見やカイロ見物に出かけられたが、多田参謀等はアレキサンドリアで静養された。その夜半、東郷元師逝去の報が届き、艦上アットホームの取りやめ等大変であった。

士官候補生のうちには偉い将官の息子などもいますし、航海中の成績が皆卒業成績にも影響するのです。私は二度の艦上講演を担当し、親しく候補生に接し、彼らの真剣な勉学態度に接し感服しました。このとき特に印象深かった私の中学の先輩田辺軍医をスエズ運河会社の工場視察の時見つけたのみならず、多田、鮫島両参謀等が私の婚約者に親切であったことです。さらに、ランチで見学者を運んでいた候補生がエジプト人の小舟にペンキが少しはげる程度のカスリ傷を与えたら、そのエジプト人はかんかんになって怒り、その候補生に文句を言っていた。これを見た私は、エジプト人に二十ピアストル渡し、これでよいかと納得させました。その候補生は深く礼を言ってくれたのみならず、出航後丁重な礼状をよこしました。

#### 十、商品館の活躍

それから商工省の方としましては、貿易斡旋所になる前に、昭和三年にカイロに大規模な商品館を設けました。これはミスル銀行の二階建てのちょっと古い建物を改装したもので、カスル・アル・ニール通りからちょっと横へ入った所がありました。所長以下主任等六人という大規模なもので、商品陳列と同時に貿易を斡旋するのでありました。当時ヨーロッパへ赴く日本人は、スエズで下船し、陸路カイロへ赴き見物を終えて、カイロより汽車でポートサイドへ行き、同地で運河を通過してきた船に乗るのが習慣でした。所長の右手さんは農学士であるが、なかなかの政治家肌の人で、これらの邦人が商品館を訪れると茶菓を供し、エジプト事情を一席弁ずるのが得意でした。

商品館は第二次大戦の直前に貿易斡旋所となり、カイロからアレキサンドリアへ移り、カイロに居た滝副所長は新設のカサブランカの所長となりました。カサブランカは非常に重要であり、所員三名でした。

その後、バグダードにも開設されることとなり、カサブランカより小林君が転じました。小林君の後任に来た若林君は、欧州に戦争が起こった頃より精神に異常をきたしましたので、郵船船長に頼んで護送してもらいました。

昭和十六年八月、私がカサブランカ領事館を閉鎖した後も、貿易斡旋所は残っていました。同領事館は翌年再開されましたが、同年晩秋、米軍の上陸とともに邦人はすべてリスボンへ逃れました。

バグダードの小林君は、わが国の参戦前の最後の引揚船で内地へ帰りました。

#### 質疑応答

Q (質問、以下同じ) お話の中で、戦争が始まってか在留邦人が引揚げたとのお話が出ましたが、たとえば在留邦人を世話するというのに関連し、在外の財産はどうなるのですか。

田村 中東に居た在留邦人の引揚げは、わが国が参戦する直前に、バンドル・シャプールなどへの配船ですべて引揚げさせ、イラクで残ったのは私たち外務省員のみでした。わが、イラクにおける利権は、トルコ政府に委任されました。カサブランカは、日本が戦争に加わって領事館が必要となり、外務省は私をトルコ経由で同地へ送らんと考えたが、トルコ行きが許可にならなかったため、マルセーユの高和領事が赴任しました。しかし、十七年の十一月に米軍がモロッコへ上陸して来たので、スペインへ逃げたわけです。その時、残留邦人も一緒に逃げた次第です。そして在外財産は、皆一応押収または没収されたわけです。エジプトとイラクについてはなしましょう。エジプトは当初断交国ですから、邦人の財産は外交官個人のものは差押さえられず、政府のものとして残っていたのは、公使公邸と公使館です。公使館の備品は売却し、公使公邸の家具は同公邸を借り入れたブラジル大使に貸したのでした。

戦後、私がこの家具の返還をエジプト当局に求めましたところ、三ヶ月の予告をして全部返還されました。その上、ブラジル側より取り立てていた賃貸料等一万数千ポンドより一割の管理費を差し引き、エジプト政府は日本側に渡してくれました。当時エジプトは外貨が少なく、このポンドは外貨に換算できぬものでした。外務省から出納官吏の私がエジプト公使館の開設費として受け取った金は、自動車購入費の四千ドルを除いて一万二千ドルという僅少なものでした。この額で公使公邸と事務所を開設せよというわけですね。私



がわが家具等の返還を求めた交渉相手は経済局長アブー・ダハブさん（エジプトが日本に大使館開設の時参事官として赴任しました）と敵国財産管理局長でした。後者には何かと世話になったものですから、真珠の首飾りを贈呈した次第です。当時、昭和二十七年の暮で、真珠の首飾りは一万数千円のを贈りましたところ、翌朝、彼は私の所へとんで来て「こんな高価なものをもらっては大変だ」と返還してきました。その後、鐘紡の五千五百番の富士絹を一反（二十五ヤード）を持参すると、喜んで受け取ってくれました。これは先の真珠より高いのですが、娘さんの多い局長は喜んで受け取ってくれました。

それから正金銀行が引揚げる時、若干のものを残しておいたが、これも皆返してくれました。それ以外の財産はエジプトにはなかった次第です。

イラクの方は、日本の公使館事務所、公邸の備品や私たちの荷物もあったのですが、全部没収されどうなったかわからない状態です。先方に見れば、対日債権との相殺だとの考えでしょうが、イラク式ともいえましょう。イラクとの外交関係再開の交渉は、始めロンドンで行われ、らちがあかずカイロへ移されたのです。イラク側は、商社が信用状を開いたが商品が送られなかったリストを示しました。これを見ますと額は僅少であり、かつ債権者はイラクを逃げたユダヤ人が殆どでした。こんなものを要求するのはおかしいじゃないかと交渉しているうちに、バンドン会議となりました。イラクの主席代表はジャマーリー国会議長ですが、会議後訪日し鳩山総理と重光外相に国会で会った時、重光外相からイラクと早く国交を開きたい旨述べられたのに対し、ファーディル・ジャマーリー代表は、今バグダードにはヌーリー総理も外相も居るから、至急できたら田村氏を現地へ派遣し交渉をと述べ、私に「あなたはいつ帰任するんだ」というから、「私はまだ二～三週間居る」と言ったら、「それじゃ遅い、誰か近隣から一人やったらいいじゃないか」と述べました。それは古内在レバノン公使（元来イラクの公使にはじめ予定されていたが、イラクとの外交関係設定が遅れたために、バイルートへ赴任された）がバグダードへ出張され、外交関係が設立したわけです。

Q 額はたいしたことはないけれども、エジプトはきわめて紳士的であったわけですね。

田村 ええ、エジプトには実際に私もびっくりしました。額はたいしたことはないと言っても一万数千エジプトポンドは公使館開設費を遙かに上回るものでした。なお、私の荷物は全部、最後に勤めていたローカル・クラークが、領事館の閉鎖命令が出た時に、大野領事が田村の荷物は奥さんの叔父の弁護士の所で預かってもらうようにと

クラークに頼みました。そのクラークは自分の住んでいるアパートの一番上の洗濯部屋へその荷物を運び、戦後私の赴任を知ると、自分のトラックでカイロまで運んでくれました。

私は正金銀行のサンフランシスコ支店に少し預金を持っていましたし、笹本臨時代理公使は戦争直前バグダードよりアメリカ経由で内地へ五千ドル送金されたが、アメリカ国内でどうなったのか受け取れない状態でした。それに較べると、エジプトはきわめて紳士的といえましょう。なお、中立国にあり、敗戦後一時凍結された個人の金は、全部解除になりました。

Q ベイルートを占領したのは、ドゴール派のカトルー将軍ですか。  
田村 そのとおりです。

Q バグダードへおいでになったのはガイラニーの反乱の後ですね。その頃バグダードというと、今とずい分変わっていたのですか。

田村 私がバグダードへ赴任したのはガイラニーの反乱後ですが、私が最初に同地へ行きましたのは、一九三五年五月十七日から七月二十三日に亘る二ヶ月以上の交渉の時で、この数年間でも大分変わっていました。最初の時には、ホテルはモード（英軍の将校名）ホテルとチグリス・パレスでした。二度目の時は、セミラミス・ホテルができていました。前者は戦後、ホテル・シンドバードと名が変わっていました。庭はチグリス河に面してそこで食事するのですが、建物は三階建の貧弱なものでした。その一番上の部屋なんかは、太陽熱を吸収して部屋では眠れません。それですから屋上で寝るのですが、それも朝五時頃になると太陽が出てくるので、室内へ入って二時間ほど眠る始末です。

戦後は非常によくなって、私が住んでいたカラダ地区は、当時ドイツの林の中にぼつぼつ家がある程度でしたが、今では住宅街となっており、どこに住んでいたのかわかりません。

Q セミラミスはその頃一流のホテルだったのですか。

田村 一九四一年九月末赴任した時は一流のホテルで、そこにイギリスの艦隊の写真がはってありました。大東亜戦争が勃発して、マレイ沖でその中の二戦艦が撃沈されると、これをイラク人が喜んでインキで消したのを見ました。ともかく、日本が戦争に入り真珠湾やマレイ沖海戦で勝利を収めた時、日本万才のデモが起きたほどです。ガイラニーの反英抗争から七ヶ月もたって、イギリスがイラクを完全に制圧しているにもかかわらず、反英気分は残っていました。戦後ガイラニーさんにカイロで会った時、宮崎公使のことを聞いていました。

Q いつ頃ですか。

田村 公使館が開設されて初めて迎えた夏でした。同家の一族には、イギリスのスパイとして日本の公使館員に接していたと思われるカー

ディム・ガイラニーもあり、また戦後私が初めてバグダードへ行き、公使館開設について話し合った外務次官のユーシフ・ガイラニーさんもいます。

Q もうガイラニーさんは亡くなったのですか。

田村 確か亡くなったと記憶しています。

時間の都合で述べませんでした。エジプトへ柔道が導入されたことに触れましょう。サダト大統領など革命将校の父とされたアジーズ・マスリー将軍が警察士官学校長時代、一九二九年同校にわが柔道が導入され、石黒敬七（後の八段、トンチ教室で有名）さんが先生として来ました。同士は二年続けて警察士官学校や近衛兵に柔道を教えました。

Q 石黒敬七氏はカイロにいたのですか。

田村 ええ。近衛兵に教えている時、当時皇太子のファルークが見に来て習いたいと言うのを、侍従の頼みで、十四才まで待ってくださいと断ったこともあり。またファード王の前で十人抜きをやるので、石黒さんは選抜生徒に尻をひっこめ頑張らぬように言ってくれと私に頼まれたこともあり。また。

Q 先ほどの関税問題に関連して、ご自身で各種織物の生産地を調査されたということですが、その報告書は残っていますか。

田村 報告書は民情にも触れたもので、外務省に残っていると思います。これは写真を入れて報告したもので、各部局に模範的報告として回覧されたということ、先輩の大原さんから通報されました。

Q 正確なタイトルは。

田村 タイトルは覚えていませんが、内容はエジプトの機業状況の視察報告です。

Q 昭和何年でございますか。

田村 昭和九年です。戦後カイロに公使館が開かれた時、一番の問題は戦前課せられた差別関税を撤廃させるための通商交渉でした。私は与謝野公使の命令を受けて、最初商工次官に会い、日本製品がエジプト品に脅威とならぬことを値段をあげて説明しました。彼はミスル機業の代弁者の立場で私の言を信じない。私の示した価格表で、日本品がインド品や他の国より高いことを信じず、日本綿花（現在の日棉実業）のクラークであったモロコ君にその表の真偽を訊訊しました。それで、この表は彼に作成してもらったものですから正しいと判り、他方、同次官は私と入れ違いにラッセルティン中学に入ったこともわかり、次に会った時はよく話し合い理解してくれた。私の直接の交渉相手は、大蔵省より転じたカマル・アブドゥル・ネビー経済局長であり、その上司は初代神戸領事であったマハムード・ファウジー外相で良き日本の理解者であった。従って交渉は順調に進み、エジプト側の商工、大蔵、外務三相会議で為替補償税撤

廃が決し、貿易支払協定は五十三年十二月、同外相と与謝野公使により署名された次第です。

Q ファウジー外相とは、かなり長く外相をやったマフムード・ファウジさんですか。

田村 そうです。彼は外相ばかりでなく首相もやったし、大統領顧問にもなりました。バンドン会議の後、わが方の招待で来日しました。私はその後カイロでも会い、また一九六七年の国連緊急総会でも会いました。国連ではわが方の非同盟案賛成に対し厚く感謝し、不遇の時の友こそ真の友であると述懐していました。

Q まだ生きていますか。

田村 ファウジーさんは生存されています。

Q 田村さんに回顧録を書いてもらったらおもしろいですね。

田村 「アラブと共に五十年」というのを中東経済研究所の雑誌に少し書き、これを詳細にしたものを「アラビア語 日本語辞典」の終わった後に完成することになっています。三～四の出版社が出版すると言ってくれていますが、中には女性の問題も加えてと言っているところもあります。

# 日本人とイスラームとの関係

田村秀治

とき 昭和五十四年一月二十六日  
ところ アジア経済研究所 8A会議室

## 一、初期の日本人モスリム

(一) 日本人でモスリムになった一番最初の人、皆さんもご存じのように有賀文八郎さんで、これについては森本武夫さんが『アッサラーム』の一九七六年六月号に書いておられます。これによりますと、有賀さんは横浜の商館に出入りして英語を覚えて、ボンベイに行きインド商人と取引しました。そのような関係でモスリムになった。それは明治二十八年か二十九年の頃であったとされています。

(二) ついで、山岡光太郎さんが明治四十二年にボンベイに行き、そこで日本と縁のあるアブドゥル・ラシード、イブラヒームさんと一緒になってメッカ巡礼をするのでありますが、その時に山岡さんは有賀さんにいる世話になったようで、山岡さんはボンベイでモスリムになり体裁を整えてメッカに入られた。私は山岡さん自身からも明治四十二年、メッカ巡礼のためにモスリムになられたというよう直接聞いたことがあります。

(三) この二人の後に続いたのが田中逸平さんや三田了一さんでしょう。これは日本の対支政策とも関係があるのではないかと思います。初期のモスリムは、本当の意味でイスラームに帰依したというより若干政治的な色彩を帯びており、多少軍と関係があったことと私は聞きもし、信じてもいます。三田さんにしろ田中さんにしろ、それから後の郡君にしろ、北支でモスリムになった人が非常に多いのもこれを裏書きしているようです。そして、南方インドネシアでモスリムになった人には、鈴木剛君が居ますし、それから戦時中に海軍に居られ、現在は日本モスリム協会会長の五百旗頭さんなんかも南方でモスリムになられた。

## 二、メッカ巡礼

(一) 次に日本人モスリムのメッカ巡礼についてであります。山岡光太郎さんの巡礼に続いたのは、前嶋さんの著書『メッカ』に出ていますように、田中逸平さんです。同氏の最初の巡礼のことは私は知らないのですが、同氏の著『白雲記』によりますと、田中さんの最初の巡礼は一九二四年の夏で、軍と関係のありました若林半さんが背後に居たことが窺われます。

二度目に田中逸平さんが来られた時には、外務省のロシア語の留学

生出身で、外務省を早くやめてトルコに永住していた中尾秀男さんが、ベルートで合流されて行かれたのであります。私は田中さんには会わなかったのですが、中尾さんが巡礼を終えてかえってこられた時に会いました。これは一九三四年即ち昭和九年でありまして、昭和五年五月末より私はアレキサンドリア総領事館に勤務していました。従ってその後の巡礼者については若干お世話申し上げたわけであります。

(二) 中尾さんがトルコへ帰る途中アレキサンドリアへ立ち寄られた時は、横山総領事の時代であります。その後の巡礼者は若い世代の郡君や鈴木君となるのであります。北田総領事(浜口雄幸さんの女婿)は、トルコ武官であった神田中佐のエジプト訪問以来イスラームに興味を持たれるようになり、アフガンに公使として赴任される前にカイロでイスラーム団体と接触され、ついでパレスチナ訪問中は、私が紹介しましたグラムフティのアミン、アル・フセイニーと二度に亘り長時間会談された。同ムフティは、北田さんの要請でアフガン国王への書簡のほかに、アブドゥル・アジーズ、イブン・サウド王と、イエメンのイマーム、ヤヒヤー王に、日本が国交開設を希認している旨を伝えてくれた経緯は前回の時に述べたとおりであります。

(三) 北田さんがアフガンに赴任された直後に山本太郎君がアフガンに行かれた。北田さんの勧めで彼はカイロに来て、アズハルで勉強することとしたので、当時アズハルで日本語を教えていた中野英治郎君が入学の手続きを手伝ったのですが、山本さんは一ヶ月余にして帰ってしまったので、中野君はアズハル当局に対し面目をつぶしたと憤慨していました。

(四) 巡礼者を前嶋さんの本にあるので追っていきますと、田中逸平さんの次に郡君(北支で回教徒になった)が団長で巡礼したのが昭和十年で、鈴木剛君と細川将君(大阪外語のインド語出身)が一緒でありました。これは若林半さんの手を経て陸軍が関係したものであります。細川君が中野君に語った話によりますと、軍が一筆書いてくれた奉加帳のような書状を持って商社筋を廻り金を集めると、努力次第であるが、一回巡礼してくると二~三年は遊んで暮らせるということであった。

このグループと巡礼を共にした山本君は自費であったと聞いています。この四人の巡礼は、大祭の時起きたイエメン人によるアブドゥル・アジーズ王暗殺未遂を目撃したのであります。

この巡礼の時、アブドゥッラ・スライマン蔵相(令息のアブドゥル・アジーズさんは実業界で広く活躍し、その弟のアハマドさんは日産自動車の代理店主である)が好遇してくれた由である。郡君が巡礼後帰ってきている話してくれたのですが、私がアブドゥル・アジーズ王やスライマン蔵相との話は誰が通訳したのかと聞くと、国王とは目と目で話してきたと答えたので唾然とさせられた。戦後、郡君は浴衣に下駄ばきで、外務省の支那語専門の岡君の所へ現れた時偶然彼と会いました。岡君にこの話をしたら、いや郡は非常に勘の効く男だ。彼はたいして支那語はできないが、支那の要人に

会ってとってくる情報は極めて正しく、従って目と目で話してくるという彼の言を信じてよいかと述べていた。

この時の巡礼については、鈴木君の巡礼記にもありますように、郡君は生死をさ迷う病に冒され、その症状はコレラに似た甚だしいアミバー赤痢であったようです。スエズ上陸前の検便では一人元気な山本君の便を出したとのことですが、これを悟ったらしいエジプトの検疫官が「日本人の便は同じだなあ」と苦笑いしたという逸話もあります。

それから、その次の年に郡君が団長で早めにエジプトに来て、まずイエメンに入り、そこからメッカへ巡礼しようとの構想であった。その年の巡礼月は三月であり、一月の中頃すぎに着いた群君一行はカイロで内地からの送金を待った。しかし送金されず、安宿とはいえ、彼らの所持金はカイロで次第になくなり、群君の依頼で天城代理公使は東郷欧亜局長に電報し、若林半に送金を督促してもらったのでありますが、結局金は届かず、巡礼も断念して帰らねばならぬ破目となり、山本君の実家がかねを立て替え、スエズから乗船して帰国の途に就いた。スエズを出航したその晩、若い植原愛算君は「ご迷惑をかけ申訳けなし」の一筆を残し紅海へ投身自殺した。帰国に先立ち、群君は「内地へ帰ったら完全に若林と手を切り、北支で活躍する」と語っていました。

その次の年、即ち一九三七年の一月（前年一月一日に公使館が開設された）鈴木剛君が団長で、細川君と毎日新聞の榎本桃太郎君（戦後、民間貿易の始まった当初、インドに行った直後に同地でなくなった）の三人がメッカ巡礼のためカイロへ来ました。榎本君が記者である関係もあり、エジプトのイスラーム運動者のモハメッド、アリー、アルーバ、パシャなどを紹介したことを記憶しています。この時の巡礼期については単行本にはなっていないのでありますが、前嶋さんの本によりますと、どこかの雑誌には掲載されたようでもあります。

その後、一九三八年の二月に鈴木君が満州国の回教徒と一緒にメッカ巡礼したのでありますが、その巡礼記を彼より直接もらって今も所持しています。鈴木君は、戦時中インドネシアで活躍していましたが、不幸にも阿波丸に乗ったため、同船がアメリカの潜水艦に謝って撃沈され笠間さんなどと一緒に殉死したのが惜しまれてなりません。

### 三、アズハル大学へ入った人びと

#### （一）益子予備中尉のアズハル留学

それからその次にアズハルとの関係であります。昭和五年の初めに、益子勇なる士官学校出の予備歩兵中尉が、クルバン・アリーさんが若林半さんの世話で、アズハルに留学してきました。その頃カイロでは、石黒敬七さんがエジプトの警察士官学校（陸軍士官学校の前身）で柔道を教えていました。当時の校長は、戦時中枢軸派といわれ軟禁されたアジーズ・マスリー将軍（ナセルやサダトの著書にも出ており、エジプト革命の父ともいわれ

る有名な人物です)が、同校に柔道を導入したのであります。私は一九三〇年即ち昭和五年五月末アレキサンドリアへ帰り、館務につくことになったので、益子さんとは一度会ったきりでありました。石黒さんはちょいちょい会っていたようで、石黒さんの談では、益子は王道をもって三億の回教徒を導くのだと豪語するなど誇大妄想狂と思われると洩らされていました。

私がアレキサンドリアの総領事館に勤めるようになって間もなく、カイロにある日本の商品館(商工省の補助金で昭和三年に開設され、右手農学士を館長とし、その下に滝副館長、横山主任、松川経理担当、それから若い青山学院出の広瀬と国土館出の深水の両君と、陣容を整え、総領事館以上の人員を有した機構でありました)の館長から横山総領事に電話があり、益子が重傷を負っているから、すぐ館員をよこしてくれということで、私が飛んで行ったのであります。カスル、エル・アイニーにある大学病院へ行き、益子を訪れ事情を聞きますと、ムカッタムの方から下へ出てくると、強盗らしい男がけんかをしかけてきたので、これを防ごうとすると大きなナイフで刺されたので、バスの終点まで遁れてきた。救急車で大学病院へ運ばれ手当を受けたのでもう大丈夫だとのことであつたが、汚い大部屋では気の毒とほかの部屋へ移らせようとしたが、単なる外傷であり、二~三日中に退院できるからこのままでよろしいというので、後事を商品館に託して帰った。彼はこの事件の後居づらくなつたのか、イランへ向かつたらしいということであつた。その後どうなつたか知らずにいたところ、七~八ヶ月後の毎日新聞に、益子がイランのどこかのモスクで死んだが公使館は何もせずほっておいたと、大段的に言葉鋭く在イラン公使館が攻撃されていた記事で、益子の死を知つた。このように、益子さんは昭和五年に来て、しばらくアズハルに顔を出しただけで、アズハルを去つた。

### (二) 山本太郎君のアズハル入り

それから、先ほど申しました山本太郎君がアズハルに来たのは昭和九年で、彼もすぐ去ってしまった。このように、アズハル入学を目指した人も、厳しい環境や難解なアラビア語のため長続きしなかつた。

### (三) 小林哲夫

昭和十一年に小林哲夫(オマル)が、若林半の系統とは異なり、角倉とかいう弁護士の肝入りでカイロへ来た。彼は岡山県の農学校を出て、日大農学部にいる時共産黨員となり拷問を受けたので、モスリムに転向したと語っていました。私は、彼をアズハルに入れる手続きをし、かつ外国人として一番良い待遇(当時は二ポンド半)を受けるとしてやり、毎週自宅へも招いて激励してやった。私は昭和十二年に帰朝しましたが、離任前に斉藤音次書記官(初代の南方局長になられた革新派の外交官)に彼のことを十分依頼しておいた。斉藤さんは、公使館の機密費を少し出してやるし、自らも少し援助してやるという力の入れようで小林君を激励し、将来外務省で傭い入れる考えのようでした。しかし、大東亜戦争前に帰国した小林君は海軍の傭員として、セレベスへ赴き同地域のモスリムの宣撫に従事した。一時帰国



した彼は、私の招きで、川崎寅雄君と虎ノ門の亀清で食事したが、カイロで大変お世話になったから今日からは代金を払わせてくれ、そうでないと死んでも死にきれないと言うので、縁起の悪いことを言うなと言ひ、彼に支払わせた。彼は帰任後、乗機が撃墜され、前田大将らと共に戦死した。その合同葬が青山斎場で大々的に行われ、私も参列しました。鈴木九萬さん(最後の在エジプト公使)より、彼には落し子があるということを聞き驚いた次第です。戦後カイロへ赴任した私を訪れたインドネシアの参事官は、私に対し、小林君の未亡人は小林君と共にアズハルに学んでいたインドネシア人と結婚し、遺児の娘さんを自分の子供として育て、皆幸福に暮らしているから、実父のことは言わぬようにしてくれと話され、私も安心した次第です。

#### (四) 萱葺信正等の留学

その後、萱葺君(三菱商事から、今では千代田化工の取締役として活躍)と後藤君が、昭和十四~五年頃、アズハルに留学してきた。二人とも大東亜戦争勃発で、結局交換船で帰国することとなった。内地へは帰らず、シンガポールで下船、戦時中南方で活躍した。

戦前における、アズハルで学んだ日本人は以上であります。

#### 四、アズハルにおける日本語教育

アズハルとの関係で特筆せねばならぬことは、アズハルで日本語が教えられていたことです。

私が留学生の二年目の終わりに近い頃、イタリー人経営のペンションに三ヶ月居ました。私はこれより先、一年先輩の大原さんと二人で、総領事館のローカルクラークのシリア人の家に下宿していましたが、大原さんが任官すれば、経費節約のためクラークを馘にすることになっていましたので、シリア人の家に居ては具合が悪いので、急拠このペンションに移った次第です。そこで知り合いになったのが、官選弁護人のシャフィー、アッラッバーンさんで、その実父のシェイフ、アブドゥル・マジード、アッラッバーンはアズハル大学の神学部長であり、同部長の長男サアド、アッラッバーンはアリー、マーヒル、パシャ蔵相兼文相の秘書課長(エジプト革命直後のアリー、マーヒル内閣の文部大臣で、行詰まっていた外交再開に途を開いてくれた人物)でした。同神学部長も夏になるとアレキサンドリアに家を借り、避暑に来ていました。同じ下宿に居ましたシャフィーさんは、イタリー学校の絵の女教師がお母さんと一緒に居たのですが、彼はしばしば私にその先生への仲介を頼みました。そんな関係で、実兄のサアドや実父にも私を紹介してくれました。その後二~三年を経て、私はシェイフ、アッラッバーンに日本統治下の満州には多数のモスリムが居ることおよび私もイスラームに傾倒しつつあることを話したら、彼はアズハルのアレキサンドリア分校の神学教授を一週間に二回無料で派遣し、私にイスラームを教えさせてくれました。

話は前にさかのぼりますが、私は留学の三年目をエジプト大学(現在のカイロ大学)へ行こうと、サアドの紹介でアリー・マーヒル大蔵大臣兼

文部大臣に会い、エジプト大学の入学の許可を要請しました。ところが同大学は文部省の所管ではなく国立大学だから文相では決定できないと言って、ルトフィ・サイド大学総長に紹介状を書いてくれました。その時私はマーヒル蔵相に、日本の葉煙草は差別待遇を受けており、明年二月エジプトが関税自主権を回復されたら、かかる差別のないようお願いすると述べたところ、マーヒル蔵相は、関税自主権を回復したらかかる差別はしないよう努力すると約された。私はこのことを山下副領事に報告すると、同副領事は休暇帰国中の横山総領事に、この旨打電された。これは、私の外交活動の最初の情報でした。マーヒル、パシャは、エジプト革命直後の総理になりましたが、当時は統一党の副総裁であり、その直後にワフド党内閣ができました。ワフド党は大衆への宣伝で、統一党や立憲自由党は国王やイギリスの手先のように悪評しました。サアドの一生師事したアリー・マーヒルさんに会うまでは、私もワフド党に魅かれがちであったが、その後は広く物を視るようになりました。

さて、前述のように、私が満州に多数のモスリムが居ることを宣伝した効きめがありましたのか、昭和九年七月、ハサネイン、アズハル事務総長が北田総領事の所に来まして、いよいよアズハルで英語と日本語をはじめて採り入れることとした。これは、新しい学部制度（神学・法学およびアラビア語の三学部）ができ、神学部を卒業した専攻生各二十名を選んで英語と日本語を教育するので、ミスター・田村をカイロへ週三回派遣してくれ、給与は旅費のほかに十六ポンドだと、私のカイロへの出講を要請してきた。北田総領事は、田村は館にとってきわめて重要な人物で閑はない、カイロには日本の商品館もあるからそこから先生を選んだらどうだと答えられたら、アラビア語ができないと困るとのことであった。総領事は、それでは中野留学生在が十月よりカイロに転学するので、彼にされたらと述べたところ、学生なら給与は田村の半分でよいかと述べた。総領事は、それでよいとされた。留学生の手当は約二十ポンドの時であり、中野君にとっては八ポンドは大きな収入であった。彼はその翌年七月任官したので、その次の年にはカイロの商品館の深水君が後を継いで教えました。そして卒業試験は、私がアズハルから頼まれて、筆記も口述も全部行いました。

そんな関係で、アズハルからは早晩日本へその中の一人を派遣するものと思われましたが、すぐには実現せず、東京にモスクが開かれてから助教授クラスのオマル師を大使館に配属してきました。アズハルでは日本語はできないけれどこの人物なら優秀と、オマル師を送ったのでした。大東亜戦争勃発と共に、エジプトは対日断交をしましたが、わが方はイスラーム政策にオマルさんを使おうとして、日本に残留するよう勧めました。しかし、彼はこれを断り帰国しました。この交渉にあたったのは、エジプト在勤の経験のある桑原書記官でした。私はインドよりロレンスマルケスへ送られ、そこで日本から来た交換船龍田丸で帰ることになっていましたところ、同地でエジプトから引揚げてこられた鈴木公使がオマル師に会うから通訳に来てく

れと言われたので、通訳しました。オマル師は、日本側の親切な申し出はよくわかるが、エジプト人として戦時下の日本で生活できそうにないので好意を辞退したと答えていました。しかし真相は、日本に勝ちめなしと見越していたように思われました。

以上はアズハルとの戦前からの関係であります。

## 五、イスラム関係の団体

次にイスラム関係の団体についてお話します。

笠間公使は昭和十一年退官されますと、トルコ、イラン在勤の経験に加えエジプトにも通商交渉のため九ヶ月くらい居られた関係で、自ら中心となって「イスラム文化協会」を設立された。理事長には、駐イタリア大使であった松島肇さんがなり、笠間さんは専務理事で、ほかに海軍予備少将の匝嵯さんなどが中心であった。同協会は二～三年後に「大日本回教協会」と発展、改組され、林銑十郎大将が初代会長となられ、その後、駐仏武官などされた四王天中将が継がれた。

代々木モスクの建設は、これらのわがイスラーム支援者が中心となったものであるが、ソ連の革命で日本に亡命してきたトルコ系タタール人が代々木周辺に多く居住しており、モスクはその代表格のクルバン、アリー名義で登記された。彼は、私のアレキサンドリア在勤時代に、トルコ語の雑誌を総領事館に送ってきていました。それで、昭和十二年夏に帰国した時彼に会ってみようとしたら、満州へ行ってしまった由であった。そこで、笠間さんに長老格のアブドゥル・ラシード・イブラヒムさんのことを聞き彼に会った。鈴木さんというトルコ語のできる女性がいて、通訳してくれました。

代々木のモスクの開堂式には、在京のトルコ、イラン、エジプトなどの大・公使のほか、サウディアラビアからは駐英公使のハーフィズ。ワハバ（元エジプト人）、イエメンからはイマーム、ヤヒヤ王の三男サイフル・イスラーム、フセイン・ブン・ヤヒヤ（一九四九年のクーデターでヤヒヤ王と共に殺された）が参列し、盛大に行われたのでした。その画報も、当時としては非常に立派にできたので、カサブランカの領事館へも送られました。

その前に「イスラム文化協会」が作成した、アラビア語による日本紹介の一雑誌（私が翻訳し、エジプト人に訂正してもらい、タイプ印刷してもらったもので、内容は現在の「Japan Today」に似たもので、軍備にも言及されていました）を各方面に配布したところ、これを輸入、展示または配布した者は軍令によって処罰するとのモロッコ統監令が官報に掲載された経緯があり、従ってこの画報の配布は見合わしました。モロッコでは領事館開設の二ヶ月前の昭和十二年の十月、アッラール、ファッシーなど独立運動者を中心とした騒擾事件があり、アラブ、イスラーム関係についての取締まりはきわめて厳重でありました。私は、カサブランカへの赴任に先立ち、エジプトから『アハラーム紙』と月刊誌『アル・ラービタトル・アラビーヤ』誌を購読手配しておいたが、一部も私の手元に届かず、モロッコ否フランス統

監府当局の手により、全部没収されていきました。イブラヒムさんは戦時中亡くなりましたが、その時の葬儀には、私も外務省を代表して出席したのですが、陸軍の参謀将校、陸海将校等て多数参列し、盛大でありました。その後の追悼式には、沢田(廉三)外務次官も列席されたのでお伴していたところ、その追悼の辞の間に警戒警報があり、早々と帰ったような次第です。

クルバン・アリーさんと、アブドゥル・ラシード・イブラヒムさんを中心に、日本のイスラーム教徒は動いていたようであります。しかしイブラヒムさんの死後、即ち戦争末期から私が一九五二年にエジプトに赴任する頃までは、その後メッカに隠棲したラスールと戦時中ペルシャ語の放送をしていたムクタディルが、モスクのイマームの役をしていました。

## 六、戦後のイスラーム運動

### (一)「ムスリム協会」設立とアズハル留学の再開

戦後少し落ち着いてきて、イスラーム運動が盛んになってきたのは、三田了一さんや、斉藤積平、森本武夫両氏らの力で、日本ムスリム協会が設立されたことによるものであります。

エジプト即ちアズハルへの留学も、昭和三十二年に浜田明夫君(アラビア石油)と鈴木珀郎(東洋火熱工業)の二人が最初であります。アズハルでは、その後引き続き留学生を招聘しなかったのは、戦前の留学生が成果を上げなかったので、両君の成果を見て方針を決めることとした由であります。両君の勉学ぶりを重く評価したアズハルでは、昭和三十六年に、飯森(拓殖大助教授)、磯崎(追手門大講師)、鈴木(住友商事)、近藤、西郷、片山(いずれも千代田化工)等、計十名と大量招聘しました。それに続いて、渥美(国際商科大助教授)、武藤(アラビア石油)、樋口、近藤(海外石油)の四君が、その後、小笠原、徳増(アラビア石油)、新井(アブダビ石油)の諸君が続いた。アズハルで勉強したアラビアストとは異なり、堀内君(東海大)とか高井君(拓大)というようなアラビストは、カイロ大で学び、イスラーム教徒ではないようであります。

### (二) メディナ大学への留学生

カイロのアズハルに対抗した意味ではありませんが、一九六一年、メディナにイスラーム大学ができ、一九六二年、二年の日本人が留学してきました。在京サウディアラビア大使館の詮衝によるもので、外務省からは何の連絡もなかった。小松製作所の出張員を日棉実業のカイロ駐在員の代田君が空港に迎えに行ったが、小松の人は来ず、二人の日本人が来た。一人は斉藤積平さんの長男で、もう一人は仲江間という男で、赤シャツを着、長靴をはいた変な男であった。当時ジェッダへ着く飛行機は、カイロ、バイルートいずれを問わず、朝頃に着くので、親切な代田君は二人を一応ホテルへ連れて行き、大使館の開く時間に二人を連れてきてくれた。何も知らない私は、外務省のアジア担当官に連絡すると、ちょうど今日メディナに帰る省員がいるから、それと同じ車に乗って行くように言ってくれた。二人に同行するた

め大使館に立ち寄った外務省員は、赤シャツ・黒い長靴姿の仲江間を見て驚き、赤シャツを脱がせ他と着替えさせたうえ、メディナへ向かった。日大芸術科出身の仲江間は、レッスン中に英語の小説を読み、敢えてアラビア語を学ぼうとせず、それでもメディナ大学は待遇が良いものだから金が残る。これで猟銃を買ったり、オートバイを買ったりしていた。学校が休みになると二人はジェッダへ来た。仲江間は、館員の森本君に、日本で革命をやろうと思ったができないのでこの地へ来た。カーバでも爆発させたらおもしろいだろうなんて言うので、さすが豪気の森本君も唾然としたとのことであった。私は彼を海に誘ったり、君はモスリムで画家ならメッカの絵でも書いてみてはと勧めた。しかし、彼の画いたものは、わけのわからない絵で買う気になれなかった。

その後間もなく、メディナの大学当局から大変なことが起きたと連絡があり、事情を聞くと、仲江間は夜間に寄宿舎を出て教室へ行き、壁一面に墨汁にて絵の落書きをしたとのことであった。その絵は平和の象徴のような鳩の絵があるかと思えば、イスラエルの国旗があり、カーバもあるとのことであった。ちょうど、三田先生がコーラン翻訳のために、長期ジェッダにおられたので、三田さんがローカルクラークをつけて、メディナの大学にあやまりに行ってもらった。

この事件が終って間もなく、断食あけの祭日となった。仲江間は大使館を訪れ、カイロへ行きたいから旅券に行先を追記してくれと頼んできた。祭日とはいえ、留学生が国外に出るには学校当局の許可を得なければならない規定があるからと断ると、森本君の所へ行き、どうも自分は気が狂いそうだ、学年末になったらすぐカイロにいけるよう行先を豫め追加してくれと泣きついた。そこまで言われて断るのも気の毒と思い、行先を追加してやった。学校が始まって仲江間は帰らないと、斉藤君より連絡があったので、どうしているかと思っていると、彼はカイロへ行き、カイロでローマ等の行先を追加してもらい、イタリーへ行ったことがわかった。それは、門脇駐イタリー大使の報告で判明したのです。同報告によりますと、レセプションが行われている公邸へ例の変な服装でのりこんで、自分は日本人だ、レセプションに出せと言ったとのことで、門脇大使はカイロの大使館宛に、同大使館がイタリー行きを追記したことを詰る報告の写しを見て判ったのです。その後の彼の消息は判らぬが、最初ジェッダへ来た時から、スペインへ行くことが最終目的だと言っていたことに徴して、メディナ留学は海外へ出る手段としたのでした。

一人残った斉藤君は、非常にまじめに勉強していました。私が帰国して一年ほど経過した頃、同君より実父に宛て変な手紙が来ました。その内容は、エジプトとサウディアラビアのイエメンをめぐる紛争に学生がまきこまれ、彼自身も去就に悩んでいるとのことであり、心配されたお父さんが現地へ行かれた。父の積平さんは他の学生と引離すため息子さんを寄宿舎から出し、アパートへ移らしたところ、そのアパートのある七階の新築の建物が

倒れ、父親の積平さんは辛うじて負傷で済んだが、息子さんは即死しました。惜しい青年を失った次第です。

そういうこともあり、しばらくメディナへの学生は途絶していましたが、斉藤君の弟さんがこられた。しかし彼はイスラームよりも歴史に興味を持ち、カイロのアインシャムス大学へ転学しました。

#### 七、戦後のイスラーム諸団体

大日本回教協会は、戦後大村さんが中野の自宅で活躍されていたが、新たに三田さん、斉藤さん、森本さん等の力で、日本ムスリム協会が、宗教法人として発足しました。同協会の努力で、山梨県の塩山にイスラーム教徒の墓地が、サウディ政府の援助でできました。また同協会は、同国のイスラーム世界連帯の援助で、三田さんのコーラン翻訳発行を手伝いました。私が代理大使の時来られた三田さんは、私が日本に帰って大分たった時に、パキスタン人の運転するジープでメディナからの帰途、ジープがひっくり帰り、パキスタン人運転手は即死、同乗の三田さんと他の一人のパキスタン人は重傷を負い、小村さんは柔道の心得もあったためか、カスリ傷程度ですみました。三田さんは回復後、翻訳完了を日本へもちこされました。私の大使の時、私はイスラーム連帯（略称ラービタ）に働きかけ、コーラン出版費用として九万六三〇〇ドルの援助を受けることに成功しました。それで、ムスリム協会ではコーラン対訳五千部を印刷し、各方面に無料配布しました。三田老師がこの事業を進めていられる頃は、ちょうどエジプトとサウディがイエメン内戦に介入して争っていた頃で、エジプトで勉強した人々はこれに関与しなかった。結局、三田さんはお嬢さんに、コーラン原文を日本語に合わすよう継ぎ足す作業を行わせた。ところが、ムスリム協会がコーランの対訳をサウディ当局に送ったところ、コーラン原文が誤って継ぎ足されているのを発見され、先方より全部消却処分にせよとの厳命が届いた。他方ムスリム協会では三省堂から日本語訳のみのコーラン二万部を、この費用から発行した。ところが、ダージャーニー大使が亡くなって、大使館ではそんな金は知らぬと言ったが、当時のムスリム協会会長の森本さんに調べてもらったら、ラービタより大使館に送金された金は半額近く、第一勧業銀行の麻布支店に残っていることが判明しました。私はこの事業について若干関係してたのみならず、三田老師の心情を汲み、種種斡旋の労をとったところ、ムスリム協会でも渋滞の非協力態度を改め協力してくれることとなり、昭和五十五年中には完全な対訳が完成する見込みです。ダッバーク、サウディアラビア大使も、この解決に満足しています。

日本のイスラーム教徒は、ご存じのように四離五滅でしょう。ムスリム協会は宗教法人であり、これを中心に結集すればよいのに、イスラムセンターが、東大農学部で学んだイラク人でリヤード大学教授をしていたサマラウィーさんの力でできた。これはパキスタン人等外人が中心となっていたので、サウディ大使のサゼストもあり、現在では小林不二男さんが代表理

事となられた。同センターは資金も豊富で、ムスリム協会と並んで正しい活動を続けています。

他方、二木秀雄氏は森本武夫さんよりイスラームについて聴き、教徒になりながら同氏と手をきり、イスラーム教団を創設し、故田中英一元警視總監、衆議院議員や元小宮山郵政大臣等の政治家や各方面の著名人をイスラームに帰依させる等、大段的に政治的に動いている。当初サウディ側に接近していたが、今では同国より離反され、最近ではイラクに接近し、同国の資金で大きなビルやモスク、病院、学校を建設しようと計画しているようであります。同氏経営のローヤル、クリニックが薬事法違反で捜索された時、同氏の経営のパン・アラブ、ニュースが大平総理はクリスチャンで、日本国内のイスラーム教徒を虐待していると世界に向けて報道させたため、パキスタンにある有力なイスラーム団体より調査団が来る等、話題を蒔き、一騒動がありました。私自身、斉藤さんが代表幹事であるイスラーム協議会の助言を願い、かつ積極的に外務省に協力し事なきを得ました。

ムスリム協会は、若い世代のアズハルで学んだ飯森、徳増両君が副会長になって、五百旗頭会長を補佐し、じみな活動を続け、イスラームセンターの代表理事である小村さんは大阪でモスクを設立され、大阪と東京の間を行き来して熱心にやっています。

#### 八、わが国におけるコーランの翻訳

最後に、日本におけるコーランの翻訳について、森本さんは、一番最初に坂本さんという東大出の文学士が英語から翻訳しておられ、ついで有賀さんの『聖香蘭経』というのがあるが、これは高橋という人が協力したとしていられます。それから、大川周明さん、ついで井筒さんの訳や、藤本、池田両氏の訳も出ています。前に述べました三田さんの対訳が完成すれば、大いに役立つと期待しています。

#### 質疑応答

中村(廣) 手元に若林半著の『回教世界と日本』という本のコピーがあるんですけども、これを読んでいますと、先程田村先生がおっしゃっていたように、日本のイスラーム教での政策というのは、非常に政治的な色彩といいますか、軍との関係というか、そういうのが非常に強いとおっしゃったわけですけども、この序文、その他をみますと、イスラームを回教政策という形でとらえているんですね。それで、ちょっと関係のある所を読みますと、「回教政策は………ここに、この小冊子を刊行し………云々」と書いてあるんですね。

田村 それは何年発行ですか。

中村 昭和十二年ですね。ちょうどお帰りになった頃なんですけども。そういうことをふまえて、かなり本文の書き出しのところ、回教

政策の回顧であるということでした、この若林半という方が、どういふふうに重要性を説き、活動してきたかということが書いてあるわけです。そして、その弟さんがいらっしゃって、実弟九満という方を満州へ遣わしたんですけれども、不幸にして、客死するんですね。そしてその後、田中逸平君をして二回巡礼の途にのぼらしめ... 翌十四年に帰朝した、というようになっています。

十四年というと大正十四年ですか。

田村 大正十四年で、これは、山岡光太郎さんに続く二度目の巡礼ですね。田中さんは前に申しましたように、昭和八年に二度目の巡礼をしています。その後が、昭和十年に郡正三君を団長とした一行四名の巡礼です。

中村 それで、山岡光太郎という人が行かれたのは明治の末ですね。この人はもちろん、最初の巡礼者ですけど、かなり苦勞して行かれているんですね。

田村 そうです。明治四十二年のメッカと云ったら、第一、道らしい道のない時代です。ジェッダとメッカの間はわずか九十キロ余ですが、それに比べますと、田中さんの二回目や、郡君一行の時代の巡礼は楽だったようですね。

中村 何か、車で途中バウンドが激しくてぶついたりして、鼻から血が出て止まらなくて苦勞したという話が出ているんですけども。

田村 やはり道路が悪かったためです。問題は巡礼者の持ってくる疫病ですね。それがため、エジプトの検疫は戦後でも飛行機で来る人は、シナイ半島のトゥールの検疫場で、厳重検査する。トゥールコレラというのは、トゥールの飛行場で発見されたコレラのこと、フィリピンコレラなどより軽い。私の在勤中、サウディにコレラが発生し、WHOより派遣されて来た長崎医大の専門教授の話では、コレラ菌は文明人には弱い。だからそんなに心配はいりませんよ、と語られた。

第二次大戦前、サウディアラビアへ行った外国人は、水を持っていったそうです。巡礼者で水を持って行けるのは、金持ちだけです。

今は道路は立派であり、給水、その他一切の設備はよくなっていますから、全然昔のようなことはありません。なお、メッカ巡礼については、私の編集になる『イスラムの盟主サウディアラビア』中のメッカ巡礼の項(別添)をご参考ください。

牟田口 ぼくはこの間、アラビア語をやっていた中野好夫さんなんかとお茶を飲んでいたら「私の友だちで郡正三という人がいました」って。中学校の同級生だったそうです。郡さんという方は高知かなにかの人ですね。

田村 終戦後、郡君は浴衣に下駄ばきで外務省調査五課(中国担当)に現われ、五課の入口にある調査四課に私が居るのを見つけ、言葉を



交した。三日ほどしてやって来て、君に良い話がある。君は奥さんをカサブランカにやって夫婦別れの生活をしているのはよくない。アラブの国のどこでもいいからすぐにでも出かけ、一緒に生活できる方法がある、とまじめな顔で話した。理由を聞くと、アメリカのために働らせ、というのである。即ち、アメリカのスパイですね。（笑）彼はしかし快男児ですね。目と目で話すというのだから。

村田 いや、この旅行記では、ずい分詳しくこういうことを語ったと書いてあるんですがね。目と目でよくあれだけ話し書けるものだと…

田村 ……。  
そうです。第一、話すひまなんてないですよ。各国の巡礼が王様に招かれるわけで、郡君たちもアブドゥラ、スライマンさんの世話で列席し、一言、二言、言葉を交す程度ですから。

私はスライマンには、代理大使の時二度ほど会いましたが、老齢で大分弱っていました。その後亡くなりましたが、前述のように長男のアブドゥル・アジーズさんは実業界で大活躍し、弟さんのアマドは日産自動車の代理店をしています。前者はわたしがの在任中にジェッダのわが大使公邸や事務所の建物を割安で新設してくれました。

中村 この巡礼記の終わりの方に、当時の経済情勢について書いてあるんですね。これには、何か、今の日本と同じようなことが書いてある。たとえば、「世界第一の日本商品優遇論」とあるんですね。それで、アラビアにおける一般市場の模様をみるに……が、実際市場に氾濫している。そういうように書いて、これはどうも、日本人から直接くるのではない、だから直接日本と取り引きしたい云々と。

田村 当時、日本郵船はアデンに寄港しており、アデン在住のインド商人の手を経て日本製の綿布や雑貨が広く売られていた。それから後になって、カイロのシリア系商人の手を経て綿布等がスエズ経由で入るようになった。アデンへの日本郵船の欧州向定期船は二週間ごとに寄港し、そこで揚げる荷物はみんな、アラビア半島、それからアフリカ東海岸、エチオピア、紅海沿岸へ中継輸出されるのであった。近東方面へはアレキサンドリア経由で入っていました。

だから当時、日本品が氾濫していたというのは事実です。中野君のアラビア紀行中にも、綿布を見たら日本のマークが入っていたと書いてありましたね。そしてその頃、すでにジェッダに日本船を寄港させてくれと日本郵船に手紙を書いたのが、アリー・リーダー商会にあります。

中岡 小村さんという方はいつ頃？

田村 小村さんは三田さんの弟子格で、一番肇にサウディアラビアへ行きましたのは、三田さんの居られた昭和三十九年です。私が帰った翌年に初めて行かれ、彼は、三田さん一行のジープの事故でも、車

からほっぱり出されたのにもかかわらず、微傷ですんだ由です。その後、小村さんは、確か石油危機の後にも行っていられます。

中岡　　モスリムになられたのは大分前ですか。

田村　　ずい分前のことです。古いイスラーム教徒にはその他に松林さん等がいます。戦後、大日本回教協会を継がれた大村健太郎さんはモスリムであったかどうか知りません。大村さんは、前嶋さんと同じく、東洋史を専攻された方です。山岡光太郎さんには、私も三度ばかり会いました。一番初めは、ポートサイドとアレキサンドリアの領事であった黒木時太郎さんの紹介で外務省へ来られた。山岡さんは、例のカーキ色の服を着て袋を下げて古い原稿を見せられ、私にどこかで出版してくれと頼まれ、一両日借りて読んだ。パレスチナの問題にも触れていられたが、時代はずれで問題にならないと考え原稿をお返しし、生活に困ってられるらしいので応分の喜捨をした。最後に会ったのは、大村さんの所での集まりで、私がパレスチナ問題について話した時でした。

中岡　　有賀さんという方は……

田村　　森本さんの記述では、日本で一番古いモスリムで、横浜の商館に出入りして英語を覚え、日常会話には不自由しなくなって、ボンベイへ赴き、明治二十八年か二十九年頃にイスラームに帰依されたとあります。山岡さんがボンベイでモスリムになられてた的に、有賀さんもボンベイに居たと言われています。

中村　　山本太郎さんがカイロへ行って一ヶ月くらいで帰られたというのは、何か事情があるんですか。

田村　　所詮はアラビア語やイスラームを学ぶというよりは、他に目的があったからでしょう。彼はその後メッカ巡礼したり、北アフリカへ足を延ばしたりしているのをみれば、だいたいの意図がわかるようです。

その後来た小林哲夫君は、私が全面的に面倒をみました。給費の最高が月額二ポンドであります。前述のアッラッバーン神学部長に頼んで、半ポンド余分に支給してもらおうようにしてやりました。

中村　　ちょっと話とはびますけれども、アズハルで英語と日本語の両方をとり入れるというのがあったと言われましたが、英語というのはわかるのですが、日本語をとり入れたというのは非常に特別な感じがするのですが。

田村　　これは、私にも責任がある程度あります。と申しますのは、在トルコ武官の神田中佐(満州事変の時に朝鮮軍の参謀で、満州郡参謀の石原中佐が近く満州で事をおこすが、その時は朝鮮軍の援助を頼むと依頼されていたので、満州事変勃発とともに、寺内朝鮮軍司令官を動かし、朝鮮軍を勝手に越境させた。神田さんはその責任を問われ、トルコ武官に左遷されたと言っていた。)はトルコで対ソ関

係上よりもイスラームの重要性を体得されたく、回教政策の重要性をさかんに北田総領事に吹き込んだわけです。北田さんは、神田中佐の影響を受けて、今までイスラーム諸国について関心の少なかったのが一変し、私の起案する近隣諸国の情勢に関する本省の報告の写しを、トルコ、英、米、仏、満州国と五大使に送られることとなりました。昔はペンで書いてコピーを五部とるわけですから強く書かねばならず、私の右手中指のタコはその名残りです。

このように北田さんもイスラームに興味をいだかれると、満州事変の時以来、私がアブドゥル・マジード、アッラッバーン神学部長（アズハル大学の総長になれなかったのは、ワフド党と反対の立場にあったからです。）が、日本語を英語とともにとり入れたわけです。

中村 何年ですか。

田村 昭和九年で、その翌年の十年と二年続けられました。

中村 それ以降は続けなかったのですか。

田村 ええ。それで、はじめ一年は中野英治郎君が教えました。彼が総領事館につとめるようになったその後は深見竜尾（本当はタツオと言うのですけれども、イタリー人と結婚したため、タツオはカツオと聞き誤まれ易いので改名）商品館員が引き継ぎました。

中岡 先程の頭のおかしい益子中尉とは。

田村 益子勇という予備中尉です。

中岡 この他に、軍人でそういうふうに入って行った人は当時居たのですか。

田村 他にはいません。ただ山本太郎君は私がカサブランカに居た頃、仏領北アフリカを旅行していますが、私の推量では、郡の命令を受けて北アフリカ情勢を調査にきたのではないのでしょうか。彼は慶応出身で、宝塚で旅館を営んでいる人の息子で、家は裕福であったと聞いています。

なお、アズハルで正規に免状をもらったのは飯森君と、アラ石にいる武藤、徳増の両君だけでしょう。

中村 徳増さんは翻訳本を出された方ですか。

田村 『モハメッドの女たち』という本を出しています。

アズハルで勉強した人びとは、アラビア語の先生となった人のほかに、多数商社で活躍しています。

中村 もちろんアズハルで勉強するにはモスリムでなければならぬわけですね。

田村 そうです。現時阿サウディアラビアへも、リヤードにあるイマーム、モハメッド、アブドゥル・ワハブ大学やメッカのイスラーム大学にも大分行ってはいますが、モスリムであることが入学の条件です。

中村 何人くらいですか・

田村 七～八人いると思います。リヤード大学なんかでも、普通の学科を勉強するにしても、モスリムでないと入学できません。

中村 でもいろいろな動機や背景があっても、たとえば最初の山岡光太郎さんの場合、何かイブラヒームと一緒にいこうとして、ボンベイでイブラヒームさんがしゃべりすぎてしまって、回りの人に異教徒と一緒に巡礼するというのがわかって物議をかもしたので、やむなく改宗して行ったというように書いてあります。最初潜入して行く予定だったのでしょう。動機としてはそういう二義的なものであったのかもしれないけれど、おそらくそれ以降、本当のモスリムになられたのでしょう。北アフリカなどにも行ってられるし。かなりイスラーム世界を東、西とずっと歩いたことが著書にも書いてありますし、皇国日本のための政策をと考えたのでしょう。

田村 山岡さんの晩年は時勢が悪いんです。もう少し後であったら、山岡さんも花を咲かされたでしょう、結婚もしていられず、遺族の方もなく、一人寂しく養老院で亡くなったことを中田吉信君が書いています。

中村 日本人巡礼者を迎える方も、特別待遇したのですか。

そうです。各国巡礼者は多数来るが、日本人の巡礼者は一名か数名と希少価値があり、山岡光太郎さんなんか、メッカのシャリーフ、フセインが食事に招いてくれた由ですし、アブドゥル・アジーズ王の時の郡君なんかでも、スライマン蔵相の斡旋で、国王の招待に招かれました。

中村 しかし、当時の特別待遇のほか一般の人たちも、ヤバーニー、ヤバーニー（日本人）と言って大切にしたのでしょう。ロシアを破った戦勝国家というので。白人対有色人種というような意識があって、かなり好意的に受け入れられた点もあるが、反面また、日本は回教民族ではないということを言っているのですね。だから異教民族としてみられているのではないかと、かなり神経をとがらせて入っているようですね。

田村 実際に礼拝の仕方も不十分だったかもしれませんね。急になったのでは。

中村 それで一種の猜疑の目で、とけこむのに、役人などに冷たい目で見られているという意識もあると同時に、政府なんか非常に特別待遇してくれた。カーバの内までも見せてくれ、食事に招待するとか、そういうのがあったのですが、一つは、むこう側に日本に対する期待というの、これをきっかけにあったのでしょうね。

田村 山岡さんの顔は知りませんが、アブドゥル・アジーズ王の時は、スライマン蔵相が日本品はどんどん入っているのだし、船でも寄港させ直接貿易をと考えたことも一因でしょう。

牟田口 スライマンというのは何人ですか。

田村       ネジド出身のアブドゥラ・スライマンで、彼自身はそんなに教育のある人間ではなかったが、アブドゥル、アジーズ王に仕え、その苦しい財政をきりもりし信頼を得ていた。息子たちの教育のみならず、出身地方の賢いような子供を教育させた。初代石油大臣のアブドゥラ・タリーキーや、駐イラク大使より外相となり、その後農相を経て駐米大使となり、最後に国王庁の顧問の時亡くなったイブラヒム・スワイルさんなどは、彼に教育されたもっとも著名な人物です。

牟田口      名門の出なのですか。

田村        当時、名門といえは部族長か富豪ですが、スライマンは頭が良く、アブドゥル・アジーズ王に早くから認められたのが幸いしたのです。

牟田口      貧しい時代のサウディを支えた大番頭みたいなものですね。

田村        ええ、その通りです。アブドゥル・アジーズ王は金銭のことは全然心配せずに、彼に委していたのです。従って彼は、サウディが産油国となってから億万長者となった。横山さんの石油利権獲得交渉が成功しなかったのは、柿坪さん（当時本省の担当官、駐エジプト大使の後退官された）の話では、先方の条件が厳しく我が方としては受諾できなかったのが真実です。しかし、アメリカやイギリス側から見れば、交渉を成功させてはと働きかけたのは事実です。

牟田口      中野英治郎さんが、その著書の中にふせていることですか。

田村        その通りです。あの時にリヤード周辺の利権をとっていても戦争となり大変だったでしょうし。戦後試掘に成功したとしても、リヤードからアラビア湾までのパイプライン建設と大変だったでしょう。山下さんがこの利権を得んと交渉した時、当時石油鉱物局長であったターキーが一番先に言ったことは、その地域よりサウディ、クウエイトの中立地帯の沖合にせよとのサゼストであった。アラ石にとっては、彼こそもっとも重要な恩人といえましょう。

牟田口      今どこにいるのですか。

田村        クウエイトを本拠としてアラブ石油という月刊誌を発行していますが、今ではリヤードへも自由に出かけコンサルタント業務も行っていきます。山下さんは交渉に当たって故ファイサル前王の義弟カマル、アドハムさんを顧問格として働いてもらいました。

牟田口      カマルさんはどんな地位ですか。

田村        当時は無冠の実業人ですが、ファイサル国王時代は国王庁顧問です。カマルさんの奥さんはエジプト人であり、サダト大統領とは革命将校前から非常に親しい間であった。

カマルさんはアラビア石油と利益の二パーセントをもらう契約していましたが、ファイサル国王来日の後で、一時金でこの問題を解決しました。

カマルさんは、私がアラビア語 日本語辞典の資金問題でくる

うしている時、一ドルが百八十七円の時でしたが三万ドル援助してくれました。

[ 別添 ]

## 田村秀治編 『イスラムの盟主サウジアラビア』

( 読売新聞社 一九七六 ) から抜粋

### 1 メッカ巡礼の先覚者たち

わが国とサウジアラビアとの関係は、アブドゥル・アジーズ王による同国の建国以前にさかのぼっている。明治の末期に日本人イスラム教徒がメッカへ巡礼したのを始めに、わが国のイスラム教徒の先覚者たちは、第二次世界大戦に至るまで次々とメッカの地を踏んでいる。また第一次世界大戦後は、アデンやエジプトを通じて、綿布や人絹織物、それに雑貨などがわが国から同国へ輸入されるにいたり、同国の有識者や商人の目も東洋の強国としてのわが国に向けられるにいたった。

#### 1 山岡光太郎氏のメッカ巡礼

日露戦争後、わが国に対する中東諸国の関心が高まったが、わが国でも、この地域に目を向けるものが続々と現れた。しかし山岡光太郎氏のごとく、ムスリムすなわちイスラム教徒となった者はなかった。明治四十二年(一九〇九年) 彼オマル(イスラム教ととしての彼の名)・山岡光太郎氏は、タタールの老志士アブドゥル・ラシード・イブラーヒーム(昭和十九年東京で死去、代々木のモスクで盛大な葬儀が行われ、筆者は外務省を代表してこれに参列した)に案内され、十二月二十一日から二十三日にかけてメッカへ巡礼した。彼は明治四十五年に『世界の神秘郷アラビア縦断記』を、大正十年には『回々教の神秘的威力』と題する著書を表しているが、とくに後書の中で、「壮烈なるアラビア巡礼」の題で苦難の巡礼について記し、「老志士とイブラーヒーム師の東導なくんば憐れ天帝の犠牲となってアラビアの草原に首を埋むべき筈であった」と、当時の巡礼が死をかけているものであったことを述懐している。山岡氏は、第二次世界大戦後、在アレキサンドリア領事であった黒木時太郎氏の紹介で私を訪れた。当時、彼は貧困の底にあったので、私は些少であったが、援助の手を差し延べた。その後一度、大日本回教協会を自宅で運営されていた大村健太郎氏の所へ、パレスチナ問題で公園に赴いたとき、メッカに向かって礼拝する山岡氏の姿を見たのが最後であった。彼の晩年は不幸つづきであつたらしく、昭和三十四年に堺市の老人ホーム福生園で寂しく生涯を閉じられたことを知った。

#### 2 田中逸平氏の再度の巡礼

遠い昔となつた山岡氏の巡礼につづいて、大正十三年、には田中逸平氏が中国人の回教と、馬録章とともに六月十四日ジェッダ着、七月八日から十日ま

での巡礼大祭に加わった。彼は当時、軍と関係のあったと言われるタタール人クルバン・ガリー師と何らかの関係があったようである。大正十四年五月刊行された彼の書著『白雲遊記』によると、大正十三年五月二十四日シंगाポール発、六月十四日にジェッダに上陸し、十八日ラクダに乗って出発し、二十日未明にメッカへ入った。途中バハラで一泊、そこで巡礼装束をととのえ、メッカに向かうにあたり、「いざさらば白衣を纏いて月の夜にラクダに乗りてメッカに向はん」と歌っている。また同著には「七月八日ラクダに騎しメッカを発してミナ、アラファート山谷にいたり、修礼、往来一週日にして再びメッカに還る。炎天熱砂の上の露営と騎行に修礼また苦難苦行と言うべきなり、死者続出惨鼻を極む、十五日歩行オムレ山谷にいたる、柔な那智にラクダにてメッカ発、十九日ジェッダ着、二十二日乗船、八月なのかシंगाポールへ帰着した」と記されている。彼の巡礼は盛夏のころであり、その苦痛は想像にかたくなく、中国人回教と八十九人のうち二十九人の死者を出したと書いている。

同氏は軍と関係の深かったといわれる若林半氏の後援で、昭和八年三月二十四日から二十六日に再び巡礼したが、この時は元外交官でトルコで改宗した中尾秀男氏が同行している。五月に東京へ帰った田中氏は、九月に胃癌で死去したことからみても、病身にムチうつ苦しい巡礼であったことが十分想像される。

それ以後の巡礼は若い世代の教徒によって行われたが、いずれも若林氏が関係していたようであった。

### 3 若いイスラム教徒の巡礼

#### 勇壮な巡礼と悲劇

昭和十年三月、郡正三君が団長となり、鈴木剛、細川将および山本太郎の三君が加わり巡礼した。彼らはイエメン人暴漢のアブドゥル・アジーズ王(通称=イブン・サウド王。ファイサル前王やハーリド現王の父)暗殺未遂事件を目撃したと語り、同王にも接見されたときの話を郡君より直接耳にしたことがある。

郡君と同行した鈴木君は、後述のように三回目の巡礼の後、昭和十四年『メッカ巡礼』なる書を著し、この暗殺未遂事件について次のように詳述している。

時は昭和十年三月十五日、所は聖地アラビア・メッカの大本山、カアバ巡拝中の突発事件であった。この日は丁度私の第一回の巡礼で、郷のようにミナにおいてイブリス打ちを済ませ、「駟足のタワーフ」を行った日にあたるのである。

その日、午前十時、大祭終了感謝報告のため、規定の如く私たちは再びメッカに來り、カアバに参殿したのであった。丁度そのとき、イブン・サウド王も侍臣数十名とともに、七周の勤行を行わせられていた。



王を始めその侍臣は、すべて私たちと同様の巡礼衣に身を潔め、行く人かの侍臣だけが護衛のため拳銃を腰に帯びていた。イブン・サ우드王のタワー中、他の一般巡礼者は、王の巡礼をさまたげないかぎりにおいてその周囲に坐し、静かに国王の巡拝終了を待っていたのである。

国王は高らかにコーランを誦読しながら、すでに第四周を終了し、五週目の半ばに及んだとき、突如！群衆の中より四人の暴漢が躍り出した。暴漢はおのおの手に匕首を翳して国王に迫った。あわやこの必殺の陰の下にイブン・サ우드国王ついに果敢なしと見たとき、勇敢は常に最後の活路を見いだすものである。

私たちの前に展開されたこの活劇は、暴漢三名の射殺と、一名の捕縛とによって簡単に解決された。全く一瞬の出来事であった。

咄嗟に部下のはなった銃声を聞きながら、「殺すな！引くくれ！」と言う国王の怒声を、私はいつまでも耳底に思い出すのである。

暴漢の始末がつくと同時に、再び以前の静寂な聖殿に戻り、何事もなかった如く、国王はなお泰然として最後のタワーを続けられたのであった。

ああ、六尺有余の達丈夫、千軍万馬の国王は、その剛毅なること、事件突発時の態度と、事件直後の従容迫らず巡拝を継続せられた落ち着きとは、さすがに三郡を叱咤し、もっとも困難なる沙漠の統一を完遂し、一顧の憂もなくこれを把握せられている、その偉大さを思い、ただただ敬服のほかなかった。

さて、目撃した暗殺事件は、かくして終末を告げたのであるが、しかしこの事件の裏面には、より複雑な、より重大な歴史的意義を持つものがあって、英国の悪辣なる暗躍政策を、遺憾なく暴露したものとして検討しなければならない。

メッカ新聞が、この事件の公表にあたり、特に慎重を期していたことを見ても明瞭に推測出来るので、当時の国際情勢から推察する時は、実にデリケートな問題であったと言える。

兇行の犯人は、ジェッダ市に永住してパン製造業を営んでいたイエメン人で、共謀者はすべてその一族であった。単位表面からこれを見れば、この事件はサウジアラビア王国対イエメン王国の敵視から生じたものということが出来よう。このような解釈は、数年前に遡ってアラビアの歴史を知る者には、両国の因果関係から当然のことと何等疑う余地はないのである。すなわち、一九三四年サウジアラビア王国とイエメン王国とは、その国境アシール地方をめぐって一大紛争を惹起し、ついに戦端が開かれ、サウードの大群はイエメン軍を追ってついに同国の要港ホディダに侵攻、これを攻略することによって首都サナアは大混乱に陥り、ついにイマーム・ヤヒヤ王はやむなくイブン・サ우드王に和睦を提議し、同年、アシールをサウジアラビア王国に割譲して和平は成立したのである。

しかるに、表面的には両国の紛争はすべて解決され、いかにも平和的な外交の締約国として誕生したごとくに見えたが、一部国民の不和は、相変わらず

ず継承せられていたことは、おおうべくもない事実であった。

イブン・サ우드王暗殺事件も、こうした情勢下において突発したので、いきおい大衆の眼は、この両刻苦のみの関係ならんと推測したのである。

しかるにこの事件は、そんな簡単な問題ではなかった。すなわちメッカ新聞ウンム・クラーも、サウトル・ヒジャーズも、ともに裏面に某国の暗躍ありと警告し、これを問題の焦点としていた事実からしても明瞭である。

英国！これこそ私たちのもっとも興味深い問題でなければならない。新聞は単に某国と告げたに止まるが、神聖大会の席上における論題は、「イブン・サ우드王暗殺者英国」と明瞭に発表した。常日ごろから反英的である回教とは、この事件によって火に油を注いだごとく、この時の神聖大会は、全く排英大会の如き様相に終始したのである。

「近東回教圏の歴史は、横暴悪辣なる英国の手によって作られる。」と叫んだ回教徒があった。もちろんこの言が全部であるということとは出来ないにしても、すべてこれに遠からざるものであった。

私は今巡礼記を書いているので、単に私の巡礼中に突発し目撃した事件を、素直に読者に報告すればいいので、あえて回教圏に対する英国の暴逆史を書く必要はない。そして今回のイブン・サ우드王暗殺事件のごときは、近東回教徒の諸国では、決して珍しい事件ではない。

しかし、一言この事件の結論を述べておこう。

「英国が、なぜイブン・サ우드王を暗殺しなけりなかつたのか。」

この答は非常に簡単である。すなわち、イブン・サ우드王の勢力は逐年増強し、英国の思うように自由な操縦が困難になりて、かてて加えて、イブン・サ우드王は、自己の勢力が強大になればなるほど、亜細亜人としての意識も増強し、過去のごとき英国の走狗には甘んじていなくなりつつあった。したがって英国の欲するがごとき、近東制覇の野望は、ここに亀裂を生ずることとなり、英国の常套手段としての最後の手段が執られたまでのことである。

「なぜイエメン人を使用したか。」

英国は常に巧妙なる暗殺者である。記述のごとく、サウジアラビア王国対イエメン王国の関係を利用して、暗殺の成功を期するには、敵意を含むイエメン人を使用することが、最善の方法であったはずである。またその結果から考えても、暗殺の罪名をイエメン人に転嫁させることは、いかにも自然である。この事件は、かくも綿密なる計画の下に企てられたのである。しかしながら、巧妙なる暗殺者の手からも水のもれることもある。イブン・サ우드王の沈勇は、兇漢の一名を捕縛し、兇行のすべてを告白せしめている。

<暗殺成功後の英国の計画は>

この問題は、私としては、明瞭に発表することはできないのである。なぜかといえば、英国はイブン・サ우드王の血縁某が、イブン・サ우드王に代って国王たらんと野望を持っていたのを奇貨としてこの兇行を行った事実があるからである。イブン・サ우드王を尊敬し奉っているがゆえに、私

には王の血縁者の中に反逆者ありとあえて言いたくないのである。英国の常に行う国王の暗殺は、自国に不利なる国王を暗殺し、自由に傀儡たり得る無能な国王を迎えようとするにある。自国の発展のためには、いかんる悪逆行為も辞さないのが英国の常套手段である。

< 結論として >

この問題を詳述していると限りない。結局、愉快的結果に終わったのである。すなわち、この兇行が未遂に終わったことが第一、英国勢力の後退が第二である。そればかりではない、この時の全巡礼者は男女を問わず、事件の真相を知り、反英意識を増大し、血を持って肉をもって、排英運動に投ぜんと誓ったからである。全回教圏より参集したるこれら十数万の教徒が、帰国後自国において語るであろう英国の暴逆行為が、決して一つの小さな出来事として看過出来ない問題となったのである。

第三はイブン・サ우드王の名声の増大である。すなわち、事件当日に王の示された沈勇は、いたく全巡礼者の胸を打ったことも事実であるし、それにも増して、サ우드国王の民草は、王の勇武をたたえ、無事を祝し、反英思想の昂揚に比例して、王に対する心服の度もあまねく昂揚されたのである。

翌年、郡君は再び団長となり、団員二人と別途参加の山本君とともにカイロまで早めに来て、イエメンを訪れた後、同地からメッカへ巡礼をしようと考えた。しかし約束の旅費は、公使館を通して東郷欧亜局長（後の外相）に打電、若林氏に送金方を督促しても着かず、結局メッカへ入ることすら不可能となり、帰国の船賃も山本君の実家が立て替えるという状態になってしまった。一行はスエズから乗船して帰国の途についたが、若い植原愛算君は「迷惑をかけて申し訳なし」との遺書を残して紅海に投身自殺してしまった。

#### 鈴木剛君の三度の巡礼

翌昭和十二年二月には鈴木君が団長となり、細川君と毎日新聞社員の榎本桃太郎君を連れて巡礼したが、私はエジプトのアラブ運動者ムハンマド・アリー、アルーバ・パシャやパレスチナのグラン・ムフティ（イスラム大司教）であったアミン・アル＝フセイニー師を紹介するなどの便宜を与えたのである。

鈴木君は昭和十四年、満州国イスラム教との張世安をつれて三回目の巡礼を行ったが、帰国後『メッカ巡礼』と題する一書を著し、これを寄贈してくれた。ジャワでイスラム教ととなった彼は、戦時中同地方で活躍した。戦争末期に帰国することとなった彼は、安全を保證された阿波丸に乗船したが、同船が誤ってアメリカの潜水艦により撃沈されたため殉死したのは惜まれる。

鈴木君はこの巡礼期の中で、張の病気に関連させ、第一回の巡礼の時の郡君の病気について次のように記述している。

題意会の巡礼は、郡、細川、山本の三君と私との四人であった。この時も大祭が終了して直ちに帰国の途につくことが出来ない用事を控えていたので、大方の巡礼者が帰途につき、メッカ市内がすっかりさびれてしまったのに、私たちは所在なく滞在しなければならなかった。

と、ある時郡君は急に発熱して、少しも食事が喉を通らなくなってしまった。私たちとしては第一回目の巡礼のことではあるし、この土地の熱病の怖しさについてもあまり関心を持っていなかったし、一つには郡君の勝ち気が、苦痛を面に表さなかったので、迂闊にもさして渋滞とは考えなかった。

山本君は都合で、一足先にジェッダへ出発してしまった。

日ごとに郡君の病気は重るばかりである。

いかに勝ち気の郡君でも、高熱に嘔吐と下痢を伴う病には、どうすることも出来ない。医者も見当らぬ当地で、さらに滞在する事は最も危険な行動にほかならない。いたずらに死を待つに等しいと言えるであろう。

細川君も私も一日も早くここを引き上げることを主張した。これを聞いて、郡君はきっぱり言った。

「スライマン蔵相閣下の約束を反古するわけにはゆかぬ。日本人としての面目にもかかわることだ。そればかりではない。蔵相との会談は、私たちにとって、重大な意義があるではないか。俺の病気が何だ！俺の病気が何だ。」

郡君の顔は、真黒なひげの中に細く尖っている。痩せ果てながらも、彼の医師は金鉄のごとく悲壮な覚悟をしているのだ。郡君は三日後に控えたスライマン蔵相の招宴を気に掛けて、これを済ませなければ、どうしても帰る気にはならぬと頑張る。

結局、蔵相の招宴を済ませてから直ちに帰国することとなり、私たちはこの三日間、郡君の看病に万全を尽くした。

実に長い三日間であった。そして三日後に迎えた蔵相の招宴は、郡君の病気に対して決していい結果を齎らさなかった。

私たちは蔵相の自動車に迎えられて、待ちに待った三日目の夕方、スライマン邸に参向した。邸内の中庭にもうけられた宴席は、実に私たちを驚かしたものである。第一に私たちの眼を奪ったものは、立派な花壇と噴水の設備とである。花壇も噴水も、読者には別段珍奇なものではないであろう。しかし真黄色な砂の色以外はすべての色が私たちの眼から消え去ってすでに二ヶ月、そして毎日、せめても私たちの心を慰めてくれるのは、夜空の星だけであった。そうした土地にこのような花壇の設備は架空の世界から急に現実の世界へ呼び戻されたような驚きと、私もやはり生きていたいのだという不思議な悦びとを感じた。同時に私は、アラビアンナイトの応急の一場面を想い出していた。

噴水の設備もまた洗い場としては贅沢の極みで、私たちが宴席に着くと、スライマン蔵相はさすがに得意らしく、夜風に霧と飛ぶ水のしぶきを浴びながら、わざわざここへ食卓を設けられた由を告げられた。

料理は純アラビア料理ではなく、和洋、否、洋食とアラビア料理とを混合

したようなものだった。

この一週間一食も喉を通らなかった重病人である郡君は、私たちの止めるのも聞かずに今こうして列席しているのだ。自動車に乗る時も、細川君と私とは、疲労している郡君を両方から抱えて乗車したけれども、郡君の強気は蔵相邸に着くと同時に、病気など全く忘れてしまったごとく平然としてこの宴席に列している。その心情を思って、その日本人としての責任感に私は人知れず敬服させられた。蔵相自ら料理を手にとって接待せられるので、郡君は出されたものを平然と片端から平げていた。私たちは人の眼をかすめて、郡君の料理を自分の皿に移すようなことまでしたが。

宴が終わってから私たちは蔵相の居室に案内された。ミナの谷での会談の内容の連続で、郡君も一時は病を忘れ、奔流のごとき熱弁で語り続けもした。

会議は次から次へと移って、前後四時間の長さにわたって、休む暇なく連続した。

この時の無理が、郡君の病気をさらに悪化させてしまった。そしてその晩から熱も三十九度を突破し、嘔吐と下痢が一時間に数回となく繰り返された。他にいろいろ残されている問題もあったが一番大事な用事も済んだので、蔵相自ら丁寧に包装してくれたサワード王旗を抱いて、早速自動車の準備を命じ、その翌夕、一ヶ月の名残を止めて、私たちは逃げるようにメッカを出発してジェッダへと向かった。車中、細川君はジェッダに着くまで郡君を抱きかかえていた。私は運転台に乗って、極力振動しないように運転士を制御していた。

ジェッダの待ちに着くまで、郡君は無意識状態であった。

船の都合で、ジェッダにおいてもさらに一週間滞在しなければならなかった。ジェッダ到着の翌日から、頼みとしていた細川君も発熱してしまった。私は一度に二人の病人を抱えて、途方にくれてしまった。

真夜中、沙漠に鳴く虫の音が窓から流れて来る。淋しい淋しい細い音色だ。郡君もこの虫の声を聞くたびに、「ああ、淋しいなあ！」と、溜息をもらした。私は郡君の腹を温める塩を焼きながら、じっとその無視の声に耳を傾けていた。

強気の郡君が、虫の鳴くのを聞いて淋しいなどと、弱気になっては、何かしら不安な予感に私は苦しめられた。

この自分から郡君は、すっかり死を覚悟してしまった様子であった。

そしてその翌日はあらたまって、

「みんな先にかえってくれ、俺はとても帰れそうもない。済まないが妻にだけは最期の様子を知らせてくれたまえ。気にかかるのは妻だけだ。今まで苦労をかけ通しだったなあ。」

全く郡君は夫人とともに落ち着いた生活をしたことなどは珍しかった。シナに数年間も滞在し、その居所さへ夫人に知らせることは稀であった。そして、ついに沙漠の地に不帰の客となる運命を覚悟せねばならないのか。

私たちとしても、郡君だけを置いて帰れるものではない。二人の病人の間

に身を置いて、私も斃れるまで看病をしようと、固く心に誓った。

私は一日中塩を焼いて郡君のお腹を温めた。二人のまどろむ暇を見ては細川君の氷を捜しに街へ走った。そうした中にも、エジプト公使館へ行って再入国の手続きや、船室の予約にも奔走しなければならない。あます旅費の一日と消えて行く心細さを、二人の病人にはさとられたくもなかった。

だが、神は我らに幸した。ともかくも私たちは帰国して今はこうして無事である。

全く郡君の気力のみが郡君を死から救ったのだ。十四日間も全然食をとらなかった郡君が、乗船の日、ジェッダ港の税関構内を歩む姿は、今でも私には涙のにじむ思い出である。

なお、前述の引用文中にでてくるスライマン蔵相について一言すると、彼はアブドゥッラ・スライマン蔵相のことであり、後述の横山公使のサウジアラビア訪問にあたり種々便宜を供した人物で、わが国との関係を強めることを望んでいた。彼の長男アブドゥル・アジーズ氏はホテル経営のほか、サウジアラビア最初のセメント会社を設立するなど実業界で大活躍し、その弟のアフマド氏は日産自動車の代理店を経営して手腕を発揮するなど、いずれも父の遺志を継ぎ、わが国との関係を深めている。

#### [ 田村秀治先生の略歴 ]

明治三十七年六月	福井県に生まる。
昭和二年三月	大阪外語ドイツ語部卒業、前年アラビア語研修のためエジプトへ留学の大原先輩に続きエジプト留学
自昭和五年五月	アレキサンドリア総領事館、エジプト公使館、
至昭和十七年二月	カサブランカ領事館、イラク公使館在勤
昭和二十七年十二月	在エジプト一等書記官
自昭和二十九年六月	在シリア臨時代理公使、在ダマスカス総領事
至昭和三十五年一月	
自昭和三十五年一月	在サウディアラビア臨時代理大使
至昭和三十八年六月	
自昭和三十八年十一月	官房調査官、欧亜局調査官
至昭和四十三年四月	中近東アフリカ局調査官
昭和四十三年五月	在サウディアラビア特命全権大使
昭和四十五年九月	在イエメンアラブ共和国兼任大使
昭和四十七年二月	退官
自昭和四十七年三月	アラビア石油参与
至昭和五十六年三月	
現在、日本サウジアラビア協力機構常任顧問	
他に、( 1 ) 中東協力センター、中東調査会、中東経済研究所、中近東文	

化センター各理事

(2) 日本イスラーム連盟副会長、日本ムスリム協会顧問

(3) 日本サウディアラビア協会副会長、日本クウエイト協会理事、  
日本シリア友好協力会臨時代表

現住所 東京都新宿区市谷薬王寺町七一牛込マンション四 七

### 編集後記

「日本とアラブ」思い出の記シリーズ第二冊には、田村秀治先生の二回にわたるご講話を収録しました。このご講話は第一次大戦前、古い頃からなおわが国とアラブ世界との貿易・外交関係、人的交流などと様々な場での関わり方を事細かに触れておられ、後進の者にとって貴重な資料を沢山含んでおります。

田村先生のお話をお聞きしてからこれを印刷するまでに随分と日時を費やしてしまいました。同先生はじめ関係者のみなさまにお詫びいたします。

本書の刊行は、トヨタ財団からの研究助成金に負うもので、同財団に対してあらためて謝意を表します。

昭和五十六年三月

日本アラブ関係国際共同研究国内委員会事務局

禁転載